

# 箱崎 58

——箱崎遺跡第84次調査の報告——



2019

福岡市教育委員会

## 序

福岡市は、古くから中国大陆や朝鮮半島など東アジアとの文化交流の門戸として、また対外交易や外交の窓口として栄えてきた地域であります。このような歴史的環境のもとに、市内には数多くの遺跡が残されており、本市におきましては保護と活用に努めているところであります。しかしながら、都市の発展に伴う開発行為によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財については、事前に発掘調査を行って、記録保存を行っています。

本書は、東区馬出一丁目地内における共同住宅建設工事に先立ち実施した箱崎遺跡第84次発掘調査について報告するものです。この調査では、古墳時代から中世の集落跡と墓地が検出され、同時期の土器、陶磁器や鉄製品など様々な遺物が出土しました。特に平安時代から鎌倉時代の集落跡は、筥崎宮を中心に営まれた中世都市としての箱崎の一部と考えられます。今回の調査では、「薩摩塔」と呼ばれる中国式石塔の破片が発見されました。この発見は、「薩摩塔」の製作や流通の年代を考える上で重要な資料であり、また12~13世紀における中国と箱崎の貿易などを通じた深い結びつきを示す発見にもなりました。

本書が、文化財保護への理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究資料として、また地域の歴史の学習の材料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、事業者様をはじめとする関係者の方々には、発掘調査から資料整理、報告書作成にいたるまで、ご理解と多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げる次第であります。

平成31年3月25日

福岡市教育委員会  
教育長 星子 明夫

## 例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が、平成29年7月3日から同年9月15日まで発掘調査を実施した、共同住宅建設工事に伴う、箱崎遺跡84次調査の報告書である。発掘調査は、建設工事によって道構が影響を受ける可能性がある範囲について行っている。
2. 道構の呼称は記号化し、土坑（土塚墓を含む）をS.K.、柱穴などピット状遺構をS.P.、井戸（と思われるもの）をS.E.、溝状遺構をS.D.、掘立柱建物をS.B.、その他の道構（性別不明遺構・特殊遺構など）をS.X.などとした。
3. 本書の遺構図においては方位北は、特に断りがないものは国上座標（世界測地系）の北である。ただし道構図によっては磁北（MN.）を用いており、その場合は明記している。磁北は真北から西偏約6°20'である（国上座標北からは西偏約6°40'）。溝疊地の国上座標（世界測地系）と標高は、国土交通省各所に設置している都市再生街区基準点から移動して座標位置と標高を求めている。
4. 本書に用いる遺構図の作成は、調査担当の久住猛彦（福岡市埋蔵文化財課）、および藤野雅基（埋蔵文化財課技術員）、西田尚史、波多江彩香（福岡大学大学院生）、裁造奈（九州大学大学院生）が行った。遺物の実測は、土器・陶磁器類は山本麻里子、平田春美、野村美樹（埋蔵文化財課技能員）、西田が行い、土製品の一部を林田憲三（同技能員）が行い、調査団時に久住が各団をチェックし一部修正した。弥生土器・飛鳥時代以前の土器・須恵器は久住が主に実測を行ったが、精製二重口縁壺は中野直澄（九州大学学生）が実測した。石製品・鉄製品の実測は、主に林田憲三（同技能員）が、中国式石塔片のうち側体Bは西田が実測を行い、鉄製刀子は神啓崇（埋蔵文化財課）が実測と製図を行った。側体Bを含む中国式石塔（「薩摩塔」）片2個体については、「九州文化財計測支援団体（CAQA）」代表の見秀彦の全面的な協力により、Photoscanによる三次元計測図を作成して頂き、これを掲載した。ただし断面図・表面凹凸図は特徴を際立たせるために西田と久住が修正したものを水見氏がデジタルトーストした。本書に用いた図面の製図は、久住のほか、小畠貴子、林由紀子、松下伊都子、鳥井幸代（整理補助員）、野村、西田、元田晃子（同技能員）、久住が製図ペインにより行った。ただし、中国式石塔片の三次元計測図の断面図・表面凹凸図については水見氏（CMA）がデジタルトーストしたものである。
5. 本書に用いる遺構写真および遺物写真は、基本的にすべて久住が撮影したものである。ただし、金属製品の蜻蛉取りおよび保存処理は松園美穂（埋蔵文化財センター嘱託）が行い、そのX線写真および顕微鏡写真是、福岡市埋蔵文化財センターの機器を用いて松園が撮影した。また、中国式石塔のPhotoscanによる三次元計測図作成のための写真撮影は水見氏（CMA）が行った。
6. 本書の執筆は、中国式石塔片の一部を西田尚史が行い、また中国式石塔片の石材鑑定については高津孝（鹿児島大学教授）より原稿をいただき、その承諾のもと掲載した。この石材鑑定は大木公彦（鹿児島大学名誉教授）が行った。これ以外の執筆と編集は久住が行った。
7. 本調査に関わる出土遺物と記録類（図面、写真等）は、全て埋蔵文化財センターに収蔵され、管理される予定である。

## 本文 目 次

I. はじめに	1
II. 調査の記録	7
1. 調査地点の位置と基本土層	7
2. 調査の概要	10
3. 検出遺構	13
4. 出土遺物	18
III. 調査のまとめ	33
図版（PL.)	35



1. I 区調査状況全景（南東から）



2. II区調査状況全景（南から）



3. III区調査状況全景（南から）



4. III区北壁面土層状況（南から）



5. III区東壁面土層状況（西から）



6. I区東半遺構検出状況（北から）



7. I区中央土壤群検出状況（南から）



8. I区西半遺構検出状況（東から）



9. I区 SX001「薩摩塔」出土状況（西から）



10. I区SX003白磁・青磁碗出土状況（南から）



11. I区 SX002 土壌墓掘削状況（南から）



13. I区 SX004 南壁遺物出土状況（北西から）

12. I区 SX004 土壌墓完掘遺物出土状況（南西から）





13. II区南側遺構検出状況（西から）



14. II区 SX205 挖削状況（西から）



15. II区 SX201 挖削状況、SX202 断面観察状況（東から）



16. II区 2面 SX508 検出状況（南東から）



17. II区 SX280 遺物出土状況（西から）



18. III区 SX3039 完掘状況（南から）



18. 「薩摩塔」個体A写真



19. 「薩摩塔」個体B写真

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市東区馬出一丁目362番地内における共同住宅建設工事に関する埋蔵文化財の有無についての照会を、平成29年5月1日付で受理した（事前審査番号29-2-93）。これを受け、経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課事前審査係（部名は当時）は、照会地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡（分布地図番号034-2639）に含まれ、周囲の発掘調査および試掘確認調査の成果から、申請地においても埋蔵文化財が存在する可能性が高いものと推定され、予定される工事内容からは建物基礎工事により地下の埋蔵文化財に影響を与える可能性が高いと判断した。そのため、申請者と協議し、建設工事対象範囲における埋蔵文化財の有無について確認することになった。これを受け、平成29年5月26日に建設工事予定地における試掘確認調査を行った。この結果、申請地の東側で地表下-90cm、西側で地表下-150cm前後において平安時代から鎌倉時代とみられる多くの遺構と遺物を確認した。これを受け、埋蔵文化財課と事業者の間で協議が重ねられ、建設工事による埋蔵文化財への影響が避けられない範囲について、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。これを受け、平成29年6月30日付で、事業者である株式会社グランディアを委託者とし、福岡市長を受託者とする埋蔵文化財発掘調査業務に関する委託契約を締結し、同年7月3日から9月15日の期間で発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、平成29年7月3日に開始し、予定通り同年9月15日に終了した。なお、資料整理と報告書作成は平成30年度に行い、同年度末に報告書を刊行した。

### 2. 調査の組織

・調査委託： 株式会社グランディア

・調査主体： 福岡市教育委員会

（発掘調査 平成29年度：資料整理・報告書作成 平成30年度）

・発掘調査および整理・報告総括

経済観光文化局文化財部（平成29年度）・文化財活用部（平成30年度）

埋蔵文化財課 課長 常松幹雄（平成29年度）・大庭康時（平成30年度）

埋蔵文化財課調査第2係長 大塚紀宜（平成29・30年度）

・事前審査

埋蔵文化財課事前審査係 文化財主事 中尾祐太（平成29・30年度）・朝岡俊也（平成30年度）

・発掘調査および整理・報告庶務

文化財保護課（平成29年度）・文化財活用課（平成30年度）管理調整係 松原加奈枝

・発掘調査および整理・報告担当

埋蔵文化財課調査第2係 文化財主事 久住猛雄

### <調査基本情報>

遺跡名	箱崎遺跡	調査次数	84 次	調査略号	HKZ-84
調査番号	1712	分布地図図幅名	034 箱崎	遺跡登録番号	022639
申請面積	475.19m <sup>2</sup>	調査対象面積	250m <sup>2</sup>	調査面積	203m <sup>2</sup>
調査期間	平成 29(2017) 年 7 月 3 日～同年 9 月 15 日			事前審査番号	29-2-93
調査地地番	福岡市東区馬出一丁目 362 番				

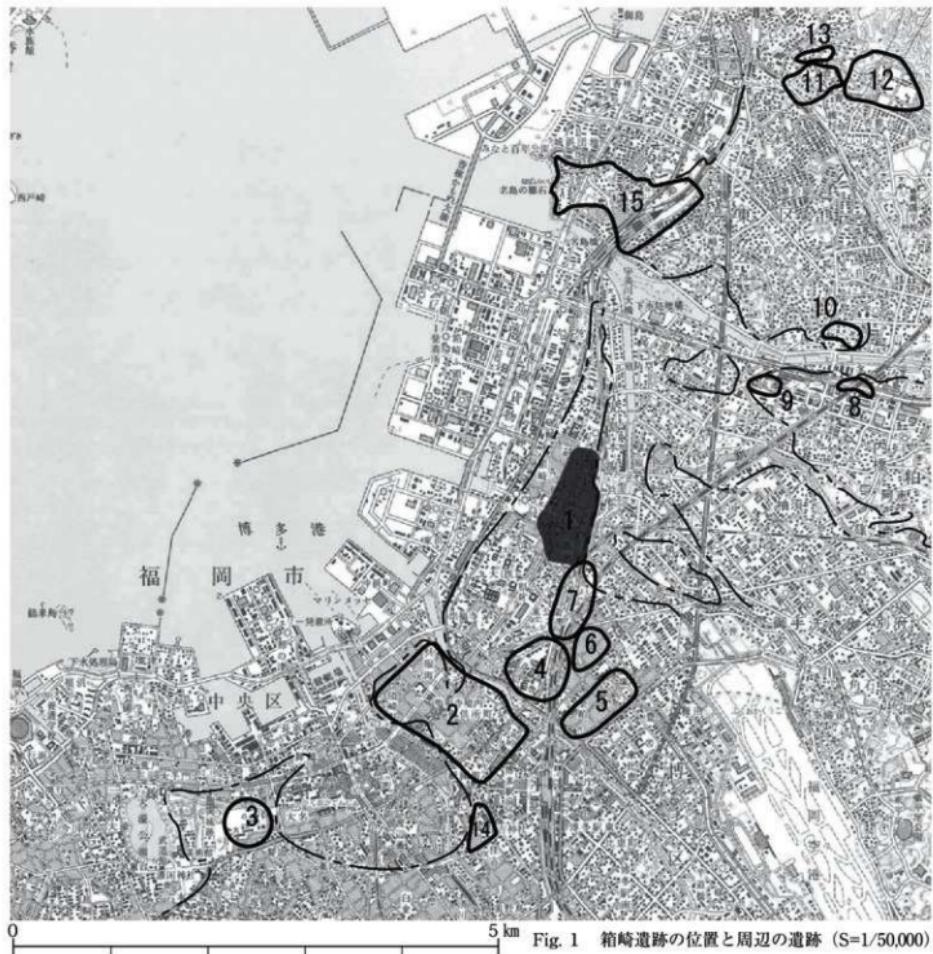


Fig. 1 箱崎遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/50,000)

- 1. 箱崎遺跡 2. 博多遺跡群 3. 鴻臚館跡 4. 堅粕遺跡 5. 吉塚遺跡 6. 吉塚祝町遺跡
- 7. 吉塚本町遺跡 8. 多々良込田遺跡 9. 多々良遺跡 10. 頤寺 11. 香椎A 遺跡
- 12. 香椎B 遺跡 13. 香椎E 遺跡 14. 住吉神社遺跡 15. 名島城跡 ※包囲地の範囲・形状は厳密ではない。

### 3. 周辺の地理的歴史的環境

箱崎遺跡は、多々良川河口の博多湾岸に形成された南北に延びる古砂丘上に立地し、10世紀前半（延長元年：923年）建立の宮崎宮を中心に営まれた集落が、古代以来現在まで連続する遺跡群である。

近年の調査では、宮崎宮建立以前の弥生時代・古墳時代・飛鳥時代・奈良時代の遺構や遺物も検出さ

れており、複合遺跡でもある。埋蔵文化財包蔵地の推定範囲は南北 1.2km、東西 0.5km に及んでいるが、九州大学箱崎キャンパスの西区への移転に伴う試掘調査や発掘調査により、さらに北側に包蔵地（遺跡）の範囲が拡大されている状況である。宮崎宮建立以後、古代末（11世紀）以降の様相は現代まで続く「都市」遺跡でもあり、特に中世の様相は「博多」に並ぶ都市遺跡として注目されている（九州史学研究会 2018）。

博多湾岸に形成された「箱崎砂層」と呼ばれる古砂丘は、東区箱崎から、博多区堅粕、博多部、中央区天神・荒戸を経て、早良区百道まで至り、自然科学的所見から、縄文時代晚期までには形成されたと見られている。これらの砂丘は旧河道や砂丘間の鞍部により画されている。画されたそれぞれの微高地上には、北側から西側に向かって、箱崎遺跡、吉塚本町遺跡、堅粕遺跡、博多遺跡群が連なって形成されている。これら遺跡群の背後の砂丘列には、吉塚祝町遺跡、吉塚遺跡も形成されている。博多遺跡群の南側の那珂川河口の砂洲右岸には、住吉神社が古代には存在し（住吉神社遺跡）、古代末から中世前期には博多、箱崎に次ぐ港町であったことが最近判明しつつある（Fig.1：註1）。

箱崎遺跡は、これら古砂丘上の遺跡群の北端にある遺跡であり、西側を博多湾、東側を多々良川水系の宇美川に画されている。箱崎遺跡が立地する砂丘の東側には、かつて中世までは入江（潟湾）が博多湾から湾入りしており（多々良潟）、中世にはこの潟湾のあった東側が「箱崎津」と呼ばれる港として機能していた。現在もこの旧潟湾が存在した範囲は比較的標高が低い土地となっている。

Fig.2は現在までの発掘調査および試掘調査で確認された砂丘面の標高を基に旧地形の等高線を推定し、その推定旧地形図に現在の地図およびこれまでの発掘調査地点を重ねたものである（中尾裕太 2018：註1）。これによると、現在の宮崎宮付近に旧地形の最高所を含む高まりがあり、これを頂部として砂丘の尾根筋が南北に延びていることが分かる。ただし宮崎宮から約 200 m 南側付近では、浅い鞍部が東西から入り込み、尾根部が狭くなっている（28・27・47 次調査付近の南側）。これより南側での発掘調査事例は今のところ少ないが、尾根部およびその西側では遺構密度が薄くなる傾向にあるらしい。ところが、砂丘東側の JR 鹿児島本線沿いの砂丘東側縁辺部では、遺跡南端から北端まで遺構がやや多く分布している。この遺構分布状況は、潟湾沿いに存在した「箱崎津」との関連を考えられる。69 次や本報告の 84 次でも比較的多くの遺構があった。さらにこの範囲では、後述する古墳時代前期を主体とする弥生時代後期から古墳時代、飛鳥時代の遺構と遺物が比較的目立つことも特筆される。84 次調査では、他ではほとんどみられない弥生時代中期の遺物もあった。一方、砂丘尾根筋前後の箱崎遺跡中央部は、調査事例はまだ少ないものの、試掘調査事例などから、やはり遺構が濃密に分布していることが推定される。さらに近年では、從来近世以降の層として把握されていたため発掘調査の対象になっていたいなかった比較的浅いレベルの層位において、中世中期（13世紀後半～14世紀）および中世後期（15～16世紀）の遺構や遺物が認められることが注意されるようになり、箱崎遺跡は博多遺跡群ほどではないものの、中世の調査に2面を要することが少なくなってきた。中世中頃以降は、遺跡の展開が砂丘東側から西側に主体が移ったともみられ（九州史学研究会編 2018、中尾裕太 2018）、一つには東側の多々良潟の埋没進行に伴う「箱崎津」の衰退、および「元寇」による旧来の街場の荒廃などが原因の可能性があるが、まだ分からぬことが多い。後者の元寇の影響については、1274年の「文永の役」において宮崎宮が焼失するなど中世都市箱崎が広く被災したことが文献上から推定されるが、これに相当する12世紀後半焼土層の広がりは一部では認められるが、不明確な部分も多く、元寇の直接的影響はまだあまり明らかになっていないと言える。今後、中世中期～後期の箱崎遺跡の展開の解明が一つの課題と言えよう。

箱崎遺跡の歴史的画期としては、まず宮崎宮の創建あげられる。同宮は延長元年（923年）に穗波

郡大分八幡宮から遷座して創建されたと伝えられる。この創建時に近い10世紀代の梵鐘鋳型遺構が遺跡北部の71次調査で検出されており注目される。永承六年(1051年)には石清水八幡宮の別宮となり、保延六年(1140年)には一時大宰府の所領となっている。権門社寺との結びつきは、畿内系土器(土師器、黒色土器、瓦器)の出土例の多さや瓦などの遺物からもうかがえる。文治元年(1185年)には再び石清水八幡宮からの補任がなされている。この間、仁平元年(1151年)には大宰府檢非違使の官人らが、博多と箱崎において「宋人大追捕」を行っている。この12世紀半ばには、『宮寺縁寺抄』の記録によると、博多と箱崎に多くの宋人(中国人)が居住し、また両地区で1,600棟以上の家屋が存在したことが伝えられるが、11世紀中ごろから12世紀にかけて、博多遺跡群および箱崎遺跡の遺構や遺物が増大して「都市化」していること、貿易陶磁の量が膨大化することなど、日宋貿易の隆盛を示す状況が発掘調査により明確になっており、文献記録を裏付けている。箱崎は、博多とともに貿易商人である宋人が居住し(華僑)、博多に次ぐ東アジア貿易の拠点都市であった。「宇治拾遺物語」や「今昔物語」には、すでに11世紀前半において筥崎宮の神官が宋人と商取引を行い多大な利益を得ていたという逸話からも知ることができる。また、今回の84次調査において「薩摩塔」に類する中国式石塔片が出土したように、箱崎とその周辺には、中国式石塔や仏像が存在し、宋人の往来・居住を裏付けている(伊藤幸司2018)。その後、先に触れた文永の役(建治二年:1274年)の元寇による被災があり、蒙古の再襲来に備えて博多湾岸一帯に「元寇防壁」が築かれることになり、箱崎の当時の海岸線近くにも築造された。つい最近まで、箱崎地区の元寇防壁はほとんど検出されておらず、後世の都市化により海岸線最前列の砂丘がほとんど削平されたため、また近世初期の名島城や福岡城の築城のため石材もほとんどが持ち去られてほとんど遺存していないとも考えられていたが、近年九大キャンパス箱崎地区の西区への移転に伴う発掘調査により元寇防壁と推定できる遺構が検出され(福田正宏・森貴教編2018)、最近もその延長線上で遺構が見つかりつつある。後世の都市化によりかなり失われたのは事実としてよいが、これまでの未検出の理由の一つには、最近までの防壁推定線が実際より若干ずれていたという理由があげられる。元寇防壁推定線は、かつての中山平次郎の推定線(中山平次郎1913・1915)が実際に近い蓋然性が高い。九大キャンパス内で検出された遺構を参考とすると、基底部近くは遺存している箇所がまだ多くある可能性があり、今後の調査に注意が必要である。元寇の後、至治三年(1323年)に沈没した韓国新安沖沈没船からは、「筥崎宮」銘舟簡も出土し、筥崎宮が14世紀前半(鎌倉時代末期)においても大陸との重要な貿易拠点の一つとして存在していたことが分かる。以後の中世後半期(14世紀中頃~16世紀)においても、『海東諸国記』、『筑紫道記』、『宗祇日記』などに「箱崎」「筥崎」の地名が散見され、海上交通の要所や箱崎松原をはじめとする名勝地として名を残している。

さて箱崎遺跡はすでに90次前後の発掘調査がなされているが、その大半は箱崎宮創建以降、平安時代中期(10世紀)以降の遺跡である。一方、それ以前の弥生時代から古墳時代の遺構と遺物の様相も明らかになりつつある。弥生時代早期~前期の遺物が最も古いが(6次磨製石斧、20次刻目突帯文土器)、以後弥生中期までの遺物は僅少である。後期以降はやや継続的になり、後期前半の壺(30次13区、69次)、後期後半の壺(22次5区)がある。84次では中期中頃、後期前半と後半の壺が出土した。いずれも遺構が不明確であるが、30次16B区には後期初頭の壺棺墓があり、小規模な集落と墓地が断続的に展開していたとみられる。弥生終末期以降、搬入品を含む外来系土器が多い土器群と遺構が展開するが、いずれも砂丘東部である。84次では弥生終末の山陰系壺または甕の搬入品がある。なお報告書で「弥生時代終末期」とされる土器の一部ないし大半は、「B系統」(久住猛雄1999・2017)の平底気味底部を在来系底部と誤認しており「古墳初頭」の場合があり(22次4区・8区の壺棺墓など)、

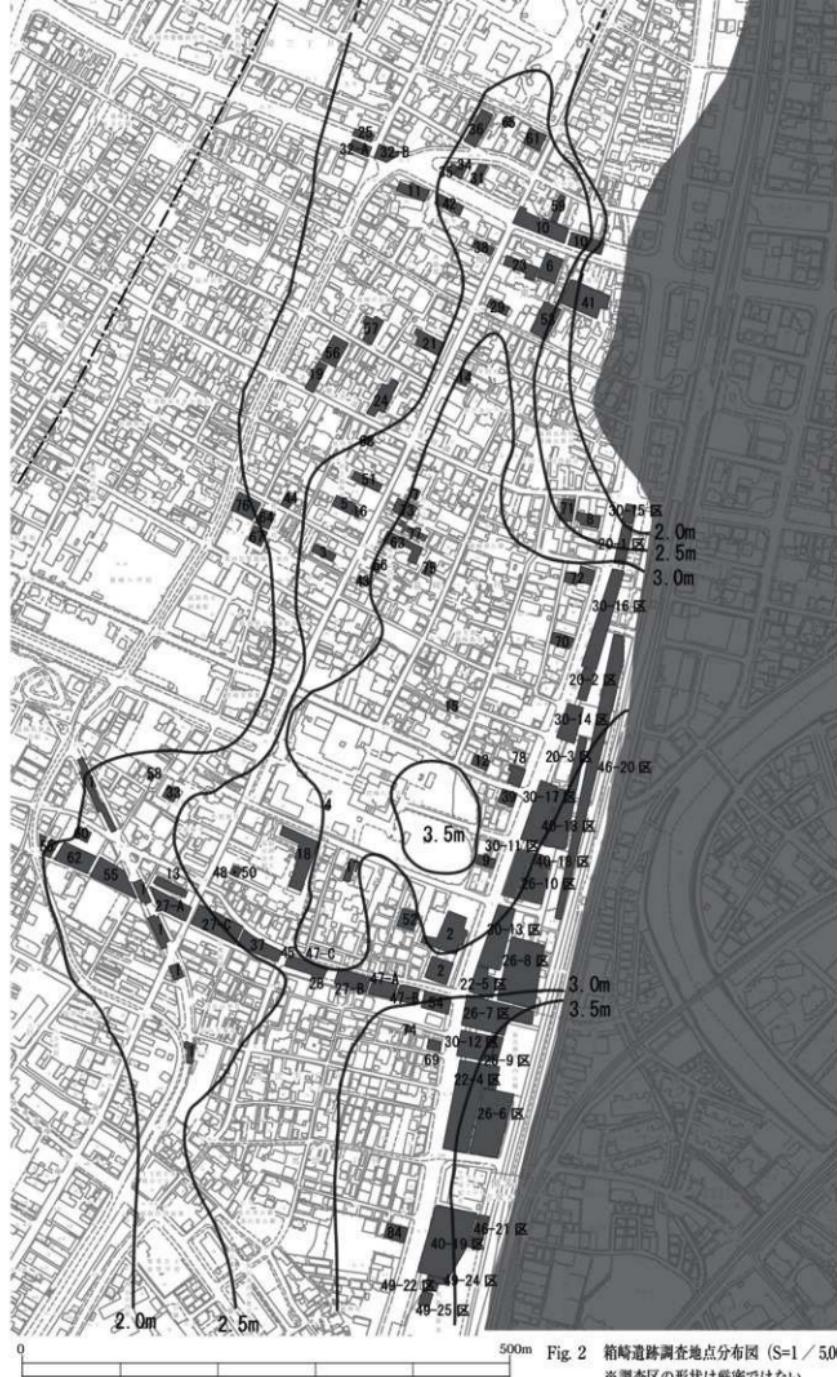


Fig. 2 箱崎遺跡調査地点分布図 (S=1 / 5,000)  
※調査区の形状は厳密ではない

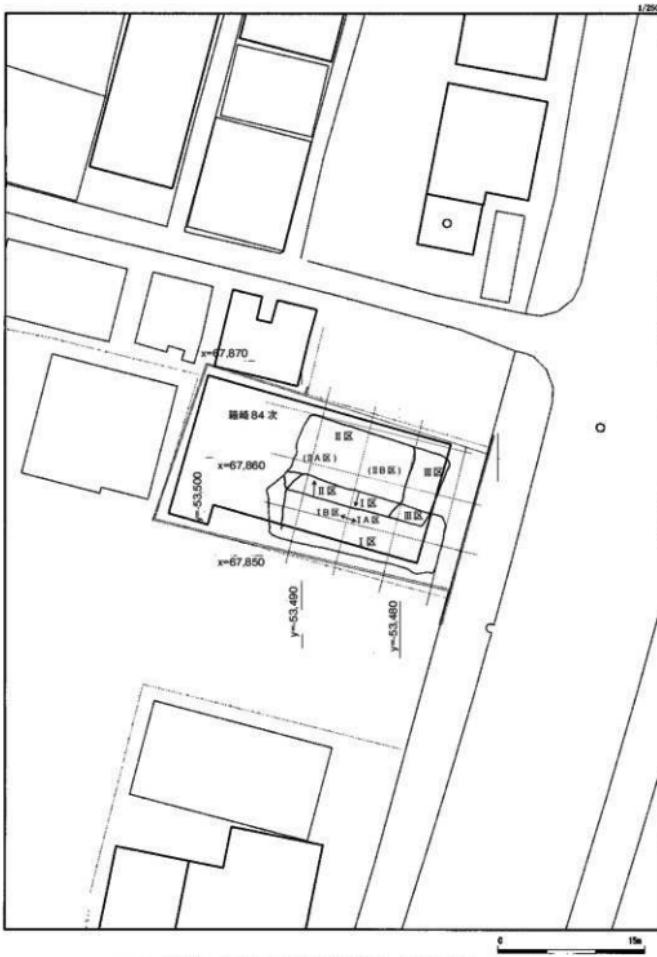


Fig.3 箱崎84次調査地点と周辺街区・国土座標 (1/500)

注意が必要である。古墳時代初頭（久住 2017 の「II A 期」）以降になり、初めて遺構と遺物の関係が明確化する。22 次 4 区 SK0021・0025 壺棺墓、26 次 6 区 SO054 円形周溝墓、同 ST056・ST088 壺（甕）棺墓、22 次 8 区 SX330 壺棺墓が II A 期の遺構である。以上を見ると墳墓が目立つが、遺構不明の遺物も同時期から増加しており、居住域も広がった蓋然性が高い。古墳初頭から古墳前期前半にかけて、東は搬入品も含む伊勢湾岸系 S 字壺（40・52 次）や北陸系甕（46 次）までをも含む列島各地の土器（他に播磨型庄内式甕、西部瀬戸内型布留系甕、畿内北西部（揖津）系布留式甕、北東四国系壺、播磨系壺など）や、韓半島系土器（馬韓～加耶の軟質土器・瓦質土器・陶質土器）までを含む列島内外からの外來系搬入土器やその在地製忠実再現品や模倣品も多数出土しており、古墳前期には列島内外の交易を担う「博多湾岸遺跡群」の一翼となった（久住 2004）。そのピークは「博多湾貿易」

の最盛期である古墳前期前半（II B～II C期）である（久住 2007）。箱崎遺跡は、「博多湾岸遺跡群」が衰退する前期後半～末以降も若干継続する遺跡の一つで、前期末相当の金官加耶（金海）系（69次）の、中期初頭～前半相当の阿羅加耶（咸安）系（46次 20a区）、馬韓（全羅道）系（40次 19区）といった韓半島系土器（陶質土器）があることが注目される。ただし集落（居住域）としては古墳中期に入ると衰退し、「古墳」を含む墳墓域が主体となるらしい。古墳後期も墳墓と集落遺構が散見される。飛鳥～奈良時代はむしろさらに僅少となるが、これは博多遺跡群の状況とは異なっている。

（註1）中尾 2018掲載の図（図1）に住吉神社遺跡と名島城跡を加えた。

（註2）中尾 2018掲載の図（図2）に、その後の最新成果を加えたものである（中尾祐太作成）

#### ＜参考文献＞

伊藤幸司 2018「世中の箱崎と東アジア」「アジアの中の博多湾と箱崎」勉誠出版

九州史学研究会 編 2018「アジアの中の博多湾と箱崎」勉誠出版

久住猛雄 1999「庄内式併行期における北部九州の土器様相」「庄内式土器研究」XⅨ

久住猛雄 2004「古墳時代初頭後の博多湾岸遺跡群の歴史的意義」「大和王権と渡来人」大阪府立弥生文化博物館

久住猛雄 2007「『博多湾貿易』の成立と解体」「考古学研究』第53卷第4号、考古学研究会

久住猛雄 2017「福岡県（糸島・早良・福岡平野）」「九州島における古式土師器」第19回九州前方後円墳研究会  
中尾祐太 2018「考古学からみた箱崎」「アジアの中の博多湾と箱崎」勉誠出版

中山平次郎 1913「箱崎の石壙」「福岡日日新聞」（中山 1984「古代乃博多」九州大学出版会、に再録、252-292頁）

中山平次郎 1915「元寇役防塁址と博多湾沿岸の地形変化」（上・中・下）『歴史地理』第25卷3～5号

福田正宏・森貴教 編 2018「箱崎遺跡—HKZ1601・1603・1604地点—」九州大学埋蔵文化財調査室

## II. 調査の記録

### 1. 調査地点の位置（Fig.2・3）と基本土層（Fig.7）

箱崎 84次調査地点は、箱崎遺跡の南にある吉塚本町遺跡（Fig.1）北端部に近い箱崎砂丘の南東縁辺部に位置し（Fig.2）、現在の周辺の標高は、敷地の西・北側で 5.2 m 前後、南・東側で 5.1 m 前後である。周囲では菖蒲土地区画整理事業に伴う調査区である 40 次 19 区地点などが妙見通りを挟んで東側にある。遺構分布は、本調査地点の方がより濃密な傾向にある（Fig.4）。Fig.2 の砂丘地形想定図では、調査区西側ではより高くなるはずであるが、調査の結果、調査区の古砂丘は一度西側に若干低くなる（一度鞍部になる）ことが判明したので、砂丘列の小列が南北に平行してあるのかもしれない。84 次 I 区の調査（巻頭図版 1、PL.1-1）では、表土除去後、調査区東側では -120cm 強で黄褐色砂層上面（巻頭図版 3-6、PL.2-2）、西側は -140cm で暗褐色～ぶい褐色砂層となり、さらに後者はさらに 20cm 前後（G L - 160cm 前後となる）を掘削すると、明褐色～ぶい黄褐色砂層上面となり、遺構が検出できた（巻頭図版 3-8、巻頭図版 4-13、PL.2-2,3）。なお I 区西側褐色砂上面でも遺構がわずかに検出できたが、ほとんど不明確であったので、「包含層」として把握し、さらに下げてから「第1面」を設定している。第1面検出面は調査区東側～中央では標高 3.7～3.8 m、中央より西側は 3.6～3.7 m である。調査では、「第1面」（Fig.4）の次に、上面で遺構の重複または不明瞭であったため把握しきれなかった遺構を少し下げてから検出しなおし、「第1面下」とし（PL.3.5～8、PL.6.4、PL.7.4）、さらにより明るい土色の砂層（黄色～浅黄色砂）上面までおよそ平均 20～30cm 下げたところで遺構を検出した面を「第2面」としている（PL.4.1～3、PL.6.5.11）。「第2面」検出遺構やその面で検出した土器群の一部は古墳時代のものであるが、多くは「第2面」でも古代後半以降の遺構である。調査区壁面の土層図は全体を記録していないが、調査区北東のⅢ区において比較的詳細な図を残している

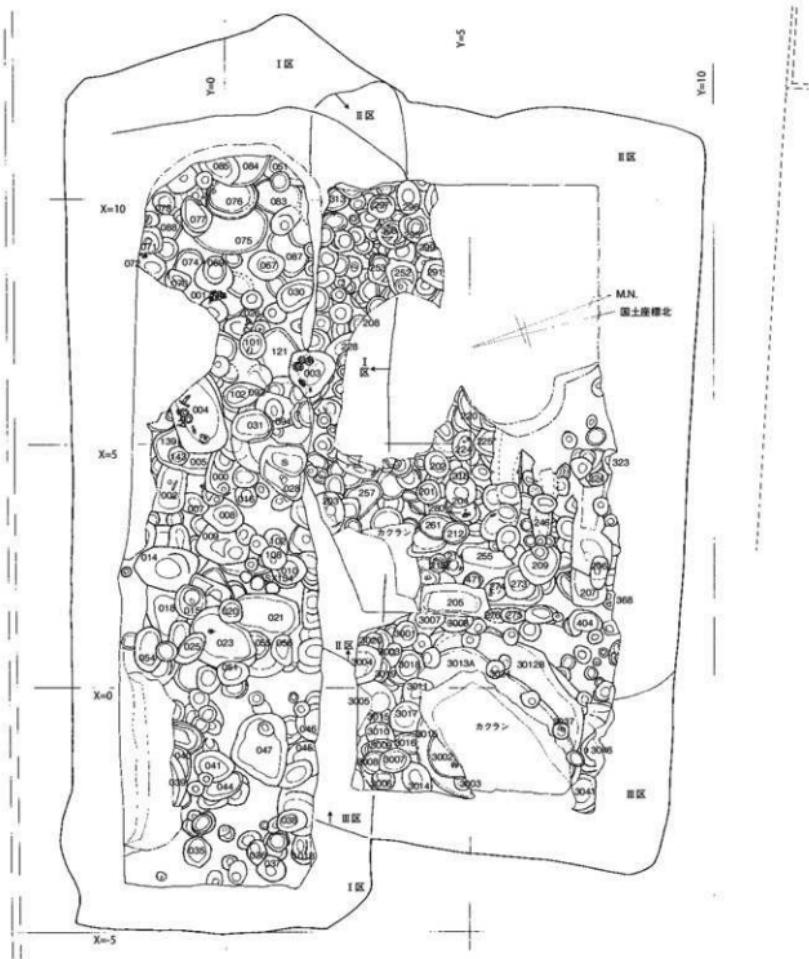


Fig.4 調査区全体図（第1面遺構分布図）（S=1/100）

(Fig.7、巻頭図版2-4.5)。基本土層は、近年の客土および攪乱があり、その下に暗褐色砂質土層、さらにはぶい褐色～褐色砂包含層、さらに黄褐色ないし～ぶい黄色砂層となり、これの上面で遺構が検出でき、「第1面」とした。さらに黄色～浅黄色砂層まで下げて遺構をもう一度検出して「第2面」としている。この間で、風成砂堆積とみられる薄い互層状あるいはラミナ状堆積がみられている。この風成砂の生成は、古墳時代前期の遺構が切り込んでいるので、少なくともそれ以前である。ただし

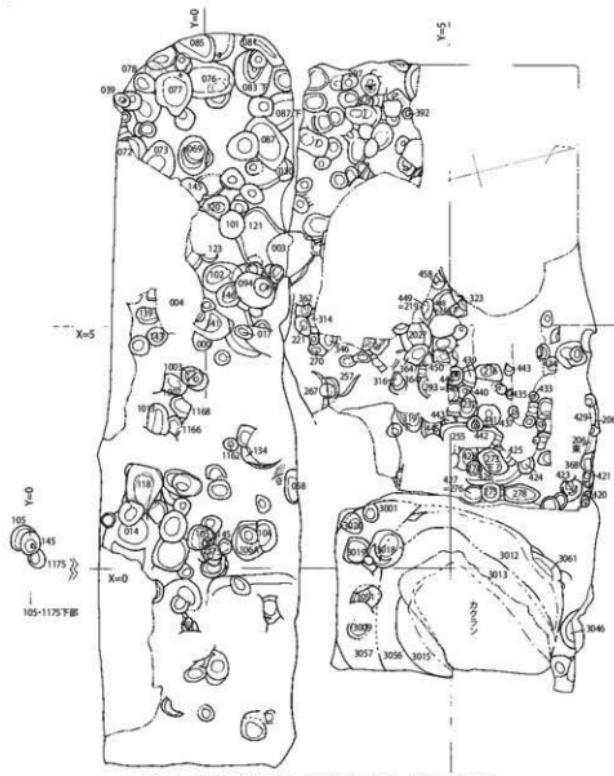


Fig.5 調査区第1面下遺構分布図 (S=1/100)

区;卷頭図版2-2、PL1-2)、最後に敷地北東の調査面積約20%弱(Ⅲ区;卷頭図版2-3,PL1-3,4)を掘削した。事前の試掘調査でも想定されていたことではあるが、遺構面が深くなり、掘削廃土を地表に人力で上げるのは困難であったが、スロープと複数の階段設置でこれを切り抜けた。しかしながら本来ならばベルトコンベアなどを用意できる余裕があれば良かったであろう。廃土置場もギリギリで、廃土の山を高くするために、土山裾部には土留めをこしらえる必要があったが、安全面では不安な部分もあった。

遺構は近現代の盛土および搅乱を除去した黄褐色～明褐色の砂層上で検出した。I区の約2割、II区の約半分、III区中央約3割には顯著な搅乱があり、遺構が失われていた。遺構の大半は11～14世紀の古代末～中世前半の多数の密集した土坑、柱穴である。菅崎宮創建時に近い10世紀代の遺物もあり、遺構は不明確だが一部含まれる可能性がある。井戸は調査区北東部(III区)で重複して数基検出したのみであるが(PL7-34)、中央に現代の深い搅乱があり、かつ調査区が狭かったことから、安全面から宝掘を断念している。土坑のうちには、小鉢の検出や平面プラン、人骨やその痕跡の検出などから

この風成砂堆積状のラミナは、Ⅲ区では中世初期の井戸や深い土坑の堆積砂でも同様になつており、区別しにくい部分もあり、中世初期（11～12世紀）にも同様の砂丘形成堆積があつた可能性もある。

## 2. 調査の概要

調査は、敷地面積と調査面積および調査面深度からする廃土量との関係から、場内を3転する必要があった(Fig.3)。まず調査面積の40%強の南半分を東西に長く掘削し(Ⅰ区: 卷頭図版1、PL-1), 次に敷地北半中央の調査面積約40%を掘削し(Ⅱ区:

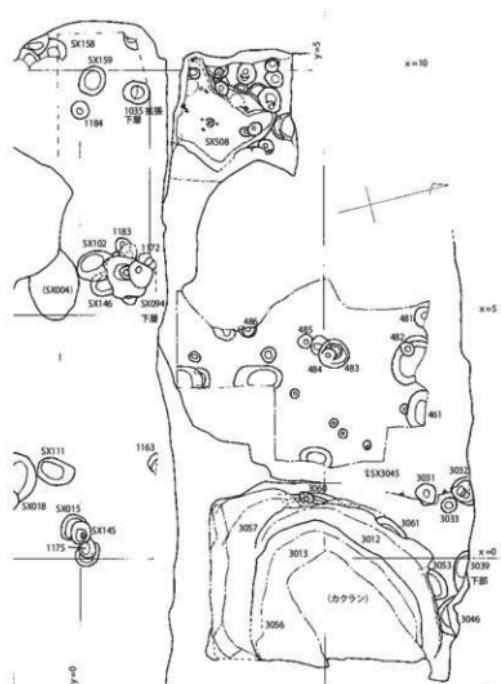


Fig.6 第2面遺構分布図 (S=1/100)

式石塔の大きな破片が出土したことが特筆される。さらに、やはり中国式石塔とみられる小破片も出土した。小片の石材は問題を孕む結果となった。いずれも時期を特定できる遺物を伴っており、「薩摩塔」などの中国式石塔で遺跡から出土した例は少なく、かつ廃棄時期が特定できる例は今回の調査が初めてと言える。この意義は後述するが、「薩摩塔」の上限（出現年代）と使用年代の一端を考える上で貴重な発見となった。

### 3. 検出遺構

以下、主要な遺構について報告し、簡潔に記述する。遺構が多数あり、報告できるのはごく一部であるが、全体の傾向はつかむことができるだろう。

#### SX001 (Fig.8上、巻頭図版3-9、裏表紙写真下、PL.4-4,5)

I B区（I区のうち任意座標 X=5 以西を I B区、以東を I A区とした）中央で、包含層から遺構面までの人力掘削途中で検出した中国式石塔（これまでの概要報告などでは「薩摩塔」としたため、便宜的に「薩摩塔A」とする；Fig.24）の出土状況を「SX001」とした。掘り込みがあった可能性が高いが、明確にできなかったので、図の範囲は仮である。ただし出土状況からみて、中国陶器四耳壺の破片（Fig.15-1）は確実に伴う。13世紀（後半？）代の廃棄であることがこれで判明し、13世紀にはこの型

土壤墓（一部はSX004など木棺墓か）と判断したものがあり、墓群をなしていた可能性がある（巻頭図版3-7、PL.2-2、PL.3-4）。また白磁と同安窯系青磁がまとまって埋納された土坑が1基ある（SK003：巻頭図版3-10）。調査区西端中央では、古代～中世遺構群の下部に古墳時代前期の大型土坑ないし溝の一部を検出した。その他、南西側（I区西側）の包含層（遺構の可能性あり）から「薩摩塔」に類似する中国式石塔の大きな破片が検出された。さらに中国式石塔の小片がII区ビットから出土した。

出土遺物は、古墳前期の古式土師器が少量ある他は、古代後期から中世の土師器・須恵器・瓦器・輸入陶器・国産陶が大半である。石製品や鉄製品も出土したほか、人骨も出土している。出土量はパンケース（中箱）にして28箱分である。石製品には、中国寧波周辺の「梅園石」に類似した（厳密には同一ではない）「薩摩塔」に類する中国



Fig7. 調査区壁土層図（Ⅲ区北壁・東壁）（S=1/40）

式の「薩摩塔」ないし中国式石塔が存在したことが遺跡で初めて分かった事例である。

SX002 (Fig.8 右上、巻頭図版 3-11、PL.4-7)

長軸190cm×短軸114cm、方位N-75°-W、検出面からの最大深度32cm（以下、他の遺構もこのように記述する）の土壙墓。鉄釘らしきものも出土し、人骨の一部もあり、木棺墓の可能性もある。瓦器碗が出土した（Fig.15-3）。人骨と遺物が検出面直下で出土し、掘方がこれより深いが、掘りすぎの可能性もある。特に西半はそうであろう。

SX003 (Fig. 8下、巻頭図版3-10、PL4-8、PL6-6)

I区とII区にまたがって検出された陶磁器埋納土坑。190×178cmの不整円形、深さ82cm、方位N-14°。E.白磁と同安窯系青磁がやまとまって出土し、他の陶磁器片も混入する(Fig.15-4~21)。

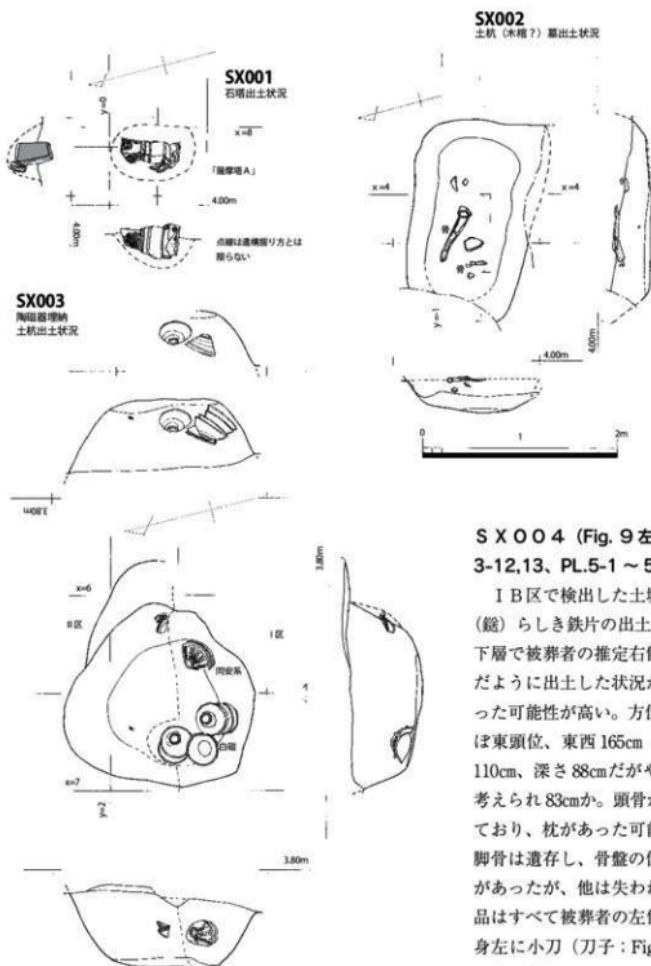


Fig.8 遺構実測図 I (SX001, SX002, SX003) (S=1/20)

**SX002**  
土棺(木棺?)墓出土状況

**S X 0 0 4 (Fig. 9 左上、巻頭図版  
3-12,13, PL.5-1 ~ 5)**

I B 区で検出した土壙墓。カスガイ(鎌)らしき鉄片の出土 (Fig.22) や、下層で被葬者の推定右側に遺物が並んだように出土した状況から木棺墓であった可能性が高い。方位 N85°E ではば東頭位、東西 165cm (推定) × 南北 110cm、深さ 88cm だがやや掘りすぎが考えられ 83cm か。頭骨が脚骨より浮いており、枕があった可能性がある。左脚骨は遺存し、骨盤の位置に骨の痕跡があったが、他は失われていた。副葬品はすべて被葬者の左側にあり、上半身左に小刀(刀子; Fig.22)があり、丁寧に布巻されていた。腹部から腹部左側に土師器壺皿類がまとまって副葬されていた。そのほか上層にも多く土師器壺皿類などがあり、木棺上部にあったものが落ちた可能性がある。12世紀中頃の墓である。

### **SK005 (Fig. 9中左、巻頭図版 3-10、PL.2-6、PL.3-3)**

墓の可能性がある土坑。115 × 90cm、N-10° -E、深さ 26cm。土師器壺、瓦器が出土 (Fig.16-10 ~ 12)。

### **SK007 (Fig. 9中中、PL.2-6)**

墓の可能性がある土坑。80 × 70cm、N-55° -W、深さ 28cm。上層で土師器小皿が出土 (Fig.16-13,14)。

### **SK008 (Fig. 9右中、PL.3-4)**

100 × 70cm、N-18° -E、深さ 16cmの土坑またはピット。木櫃などを入れた墓の可能性もある。

### **SK009 (Fig. 9右下、PL.2-7)**

105 × 62cm、N-35° -E、深さ 34 cmの土坑。北側がやや深い。木櫃などを入れた墓の可能性もある。

### **SK014 (Fig. 9左下、PL.2-7)**

129 × 90cm、N-20° -E、深さ 35cmの土坑。木櫃などを入れた墓の可能性もある。

### **SK000 (Fig. 9中下、PL.2-6、PL.3-4)**

120 × 98cm、N-73° -W、深さ 18cmの土坑。他の遺構に切られ不明確だが、土壙墓の可能性がある。

### **SK023 (Fig.10 左上、PL.2-7)**

150 × 120cm、N-48° -E、深さ 20cmの土坑で土壙墓だろう。土師器小皿・椀、黒色土器椀 (Fig.16-25 ~ 28) が出土。11世紀前半か。

### **SK021 (Fig.10 右上、PL.2-7)**

138 × 92cm、N-16° -E、深さ 10cmの土坑で土壙墓だろう。土師器椀、越州窯系青磁 (Fig.16-21,22) などが出土。11世紀代か。

### **SK028 (Fig.10 左中、PL.5-6)**

110 × 90cmの不整形土坑。N-78° -W、二段掘りで、東側の深さ 12cm、西側 24cm。主に上層で遺物が出土している。

### **SK094上層 (Fig.10 左下、PL.2-6、PL.3-3)**

094は第1面検出時と下面検出時 (Fig.11 右上) で様相が異なり、掘り直しか重複か不明確。上層は 100 × 70cm、N-59° -E、二段掘りで、西側の深さ 30cm、東側 44cm。土師器小皿 (Fig.16-56) から 12世紀前半か。

### **SK030 (Fig.10 中上、PL.2-4,5)**

85 × 58cmの不整形土坑。N-72° -W、深さ 14cm。小遺構だが遺物が多く、土師器壺皿類 (Fig.16-35,36) の他、金属器類 (Fig.22-3 ~ 5) が目立って出土していることが特筆される。12世紀中頃か。

### **SK039 (Fig.10 中中)**

搅乱で大半を破壊される。94 × 24cmの遺存、深さ 18cmだが、本来はやや大きな土坑か。

### **SK070 (Fig.10 中下、PL.2-6、PL.3-3)**

略東西 100cm × 南北 54cm以上の略円形土坑。深さ 30cm。下端から略南北が長軸で、N-30° -E。

### **SK031 (Fig.10 右中上、PL.2-6、PL.3-3)**

略南北推定 90cm × 東西 72cm、N-15° -E、深さ 24cm。おそらく土壙墓。土師器高台付壺や須恵器壺類などが出土 (Fig.16-40,41)。11 ~ 12世紀前半か。

SX004土坑（木棺？）墓 出土状況 (1/20)

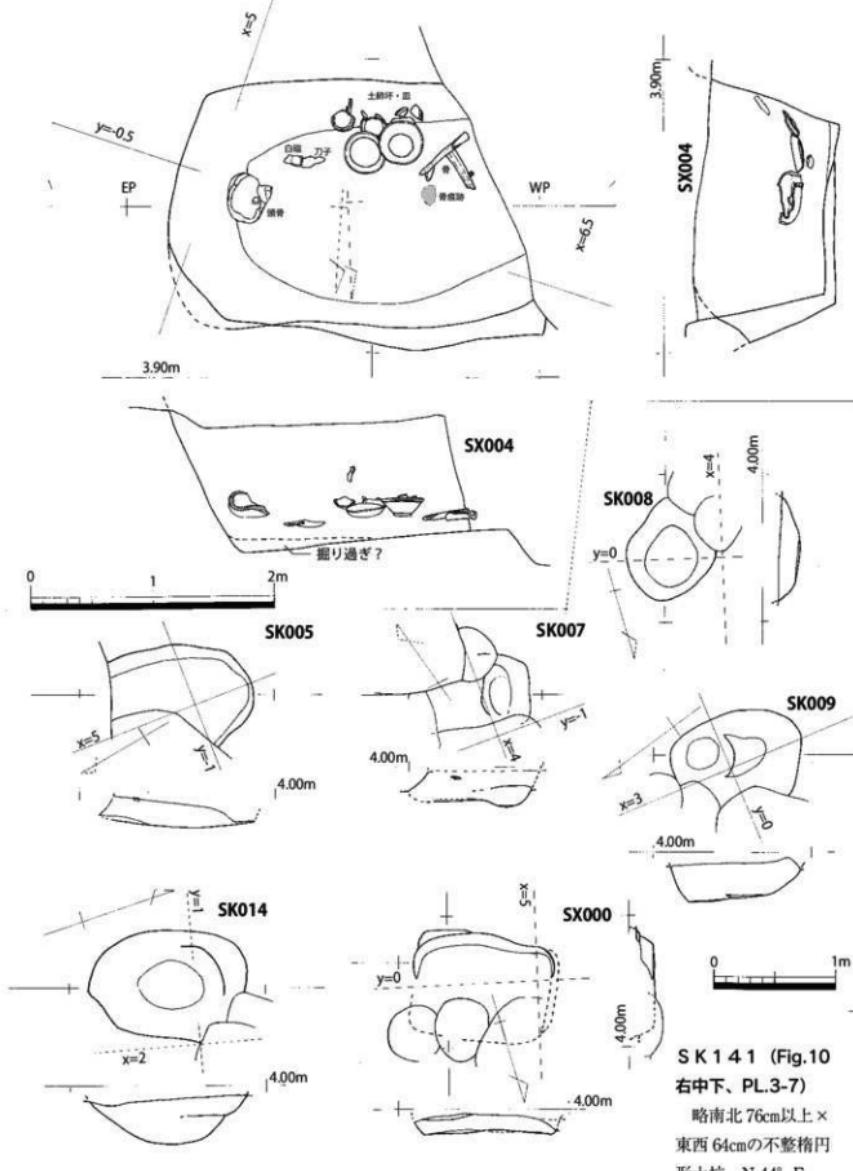


Fig.9 遺構実測図 II (S X004のみ S=1/20, 他は S=1/40)

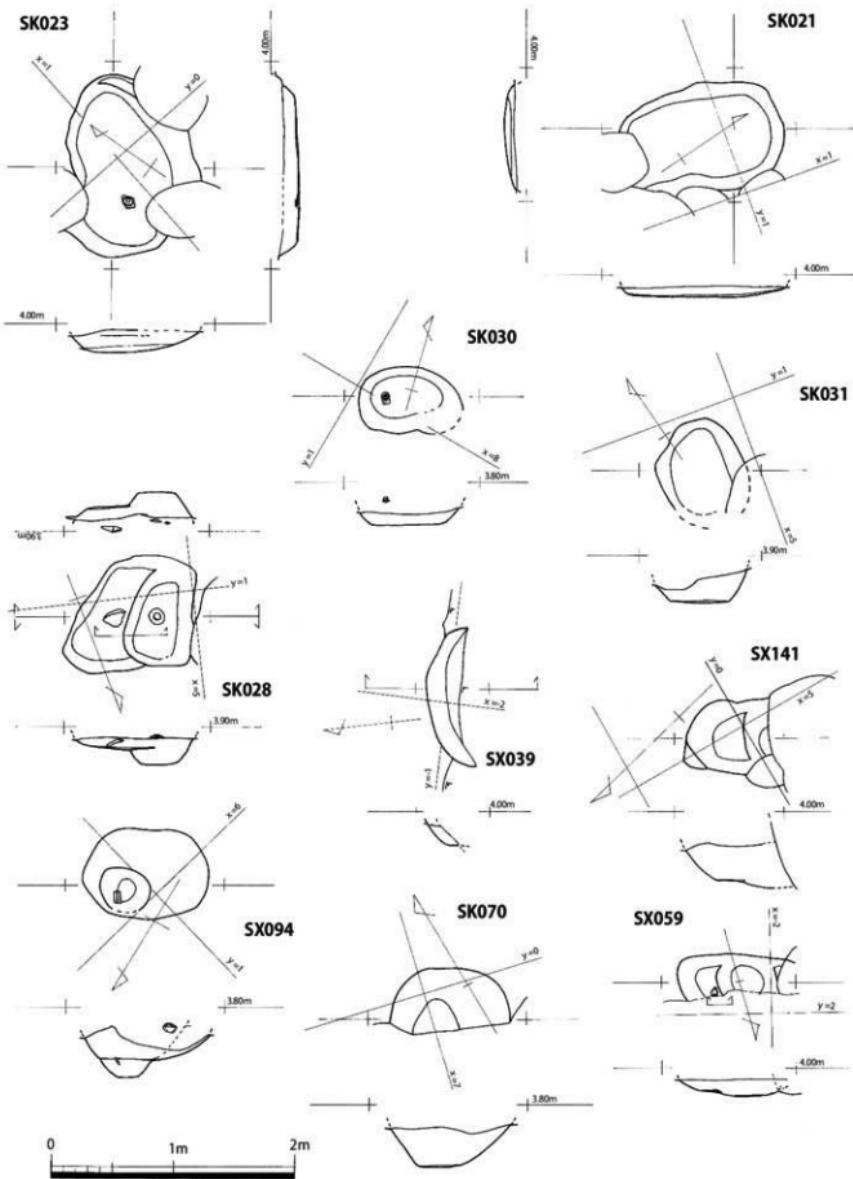


Fig.10 遺構実測図III (S=1/40)

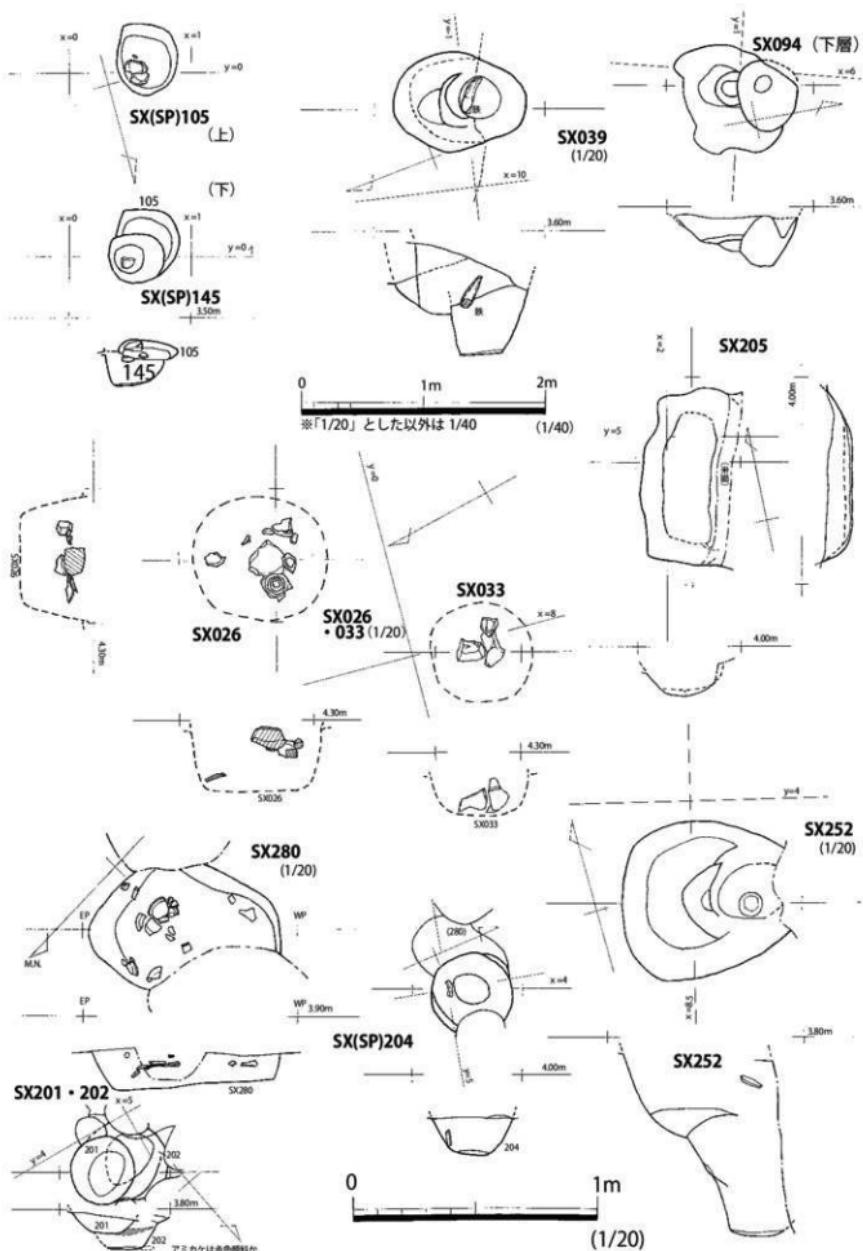


Fig.11 遺構実測図IV (S=1/40, 1/20)

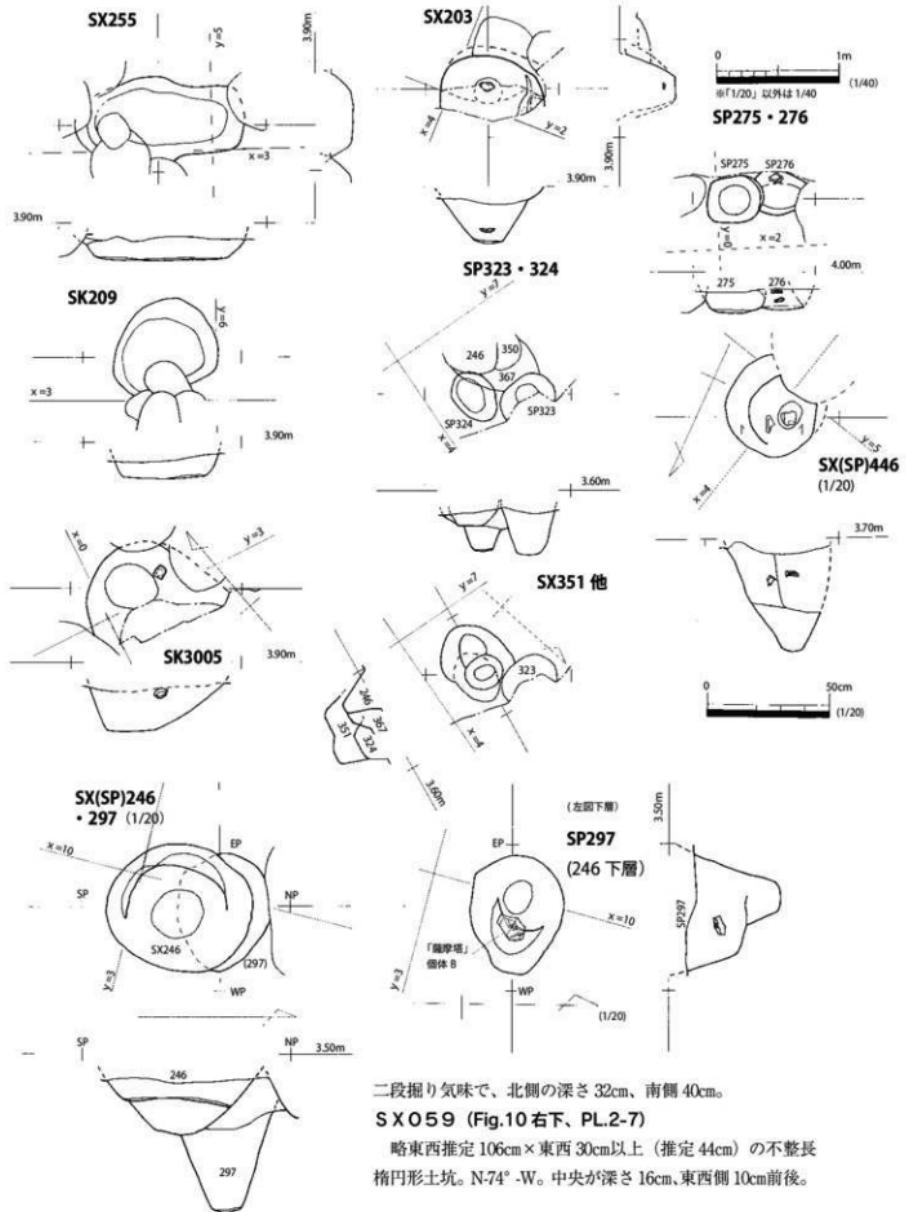


Fig.12 遺構実測図 V (S=1/20, 1/40)

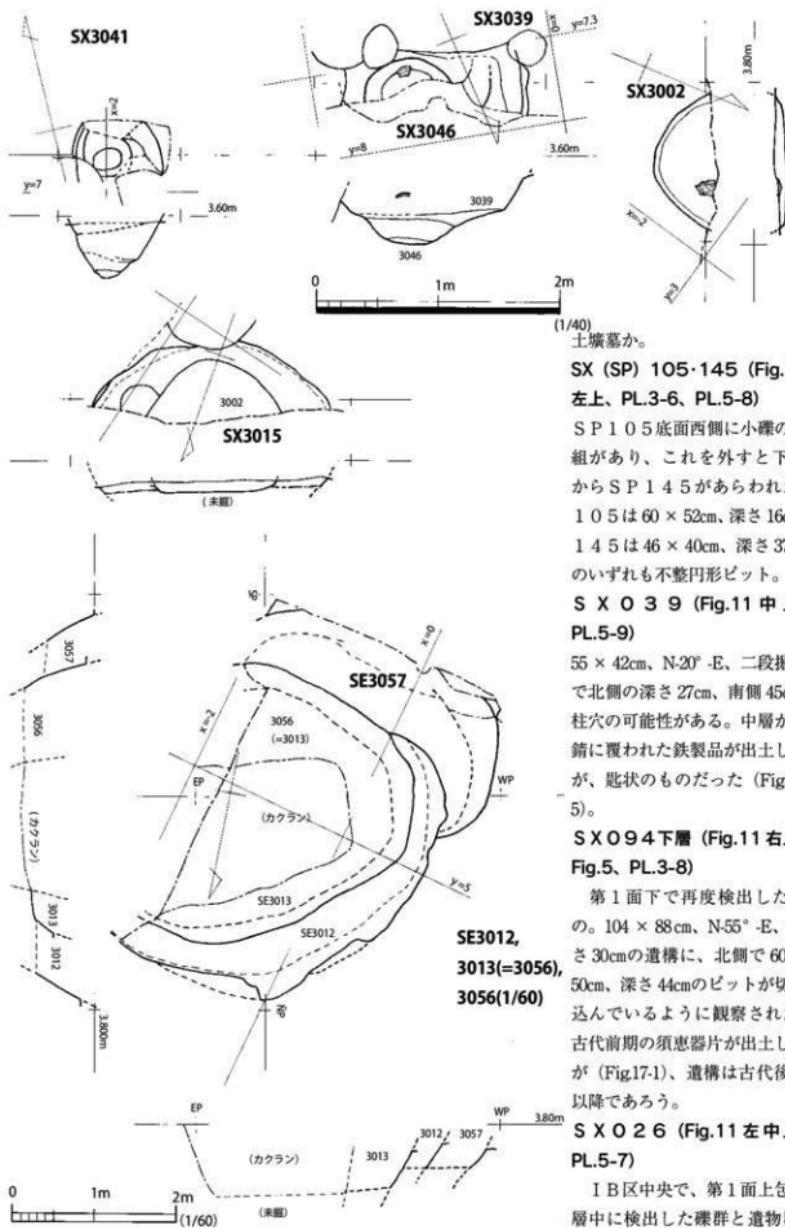


Fig.13 遺構実測図VI (S=1/40, 1/60)

cm前後、深さ30cmの遺構の可能性がある。白磁(Fig.16-39)などが出た。12世紀後半か。

S X O 33 (Fig. 11 中中、PL. 5-7)

I B 区中央で、第 1 面上包含層中に検出した疊群と遺物群。S X 001 の下部になる。掘り方は不明瞭だが径 40 cm 前後、深さ 17 cm の遺構か。土器器小皿 (Fig.16-38) があり、12 世紀中頃までか。

S X 205 (Fig.11 右中、PL. 卷頭圖  
版 4-14)

以下はⅡ区検出遺構。略南北145cm  
×東西推定80cmの隅丸長方形土坑。  
N13°-E、深さ30cm。

S X 280 (Fig.11 左中下、巻頭図版  
4-17)

略東西推定78cm×南北62cmの不整楕円形土坑。N-66°-E、深さ18cm。遺物の出土がやや多い。土器師の椀と坏皿類が出土し(Fig.17-30-33)、ほぼヘラ切り底で11世紀後半～12世紀前半だろう。

SX201·202 (Fig.11 左下、卷頭圖版 4-15)

重複しており、201が202を切る。S X 201は55×52cmの略円形、深さ18cmの土坑。S X 202は、略南北推定75cm×東西60cm、N2°-Wの楕円土坑で深さ32cm。S X 202の中層の覆土は赤味を強く帶びており、赤色顔料が含まれる可能性があった（未分析）。

S X (S P) 204 (Fig.11 中下、PL.6-1)

略南北 68cm × 東西 64cm の略円形、N-25°-E、深さ 32cm。土師器高台付壺・小皿、黒色土器（楠葉または大和）が出土し、11世紀後半か。

SX252 (Fig.11 右下、PL.6-7)

略東西推定76cm×南北65cmの不整円形、N-75°-W、深さ75cm。大型の柱穴だろう。土師器小皿(Fig.17-24)から、12世紀後半か。

SX255 (Fig.12 左上、PL.6-1)

140×70cm、N-11°-E、深さ20cmの長楕円形土坑。あるいは土壙墓か。

SX203 (Fig.12 中上、PL.6-1)

北東-南西 84cm × 推定 50cm の楕円形、深さ 50cm、N-56°-E。二段掘りで南西側にテラスあり。

SK209 (Fig.12 左中上、PL.6-1)

88 × 74cmの不整円形、N-12°-W、深さ18cm。土師器環あり (Fig.17-10)、12世紀中頃～後半。

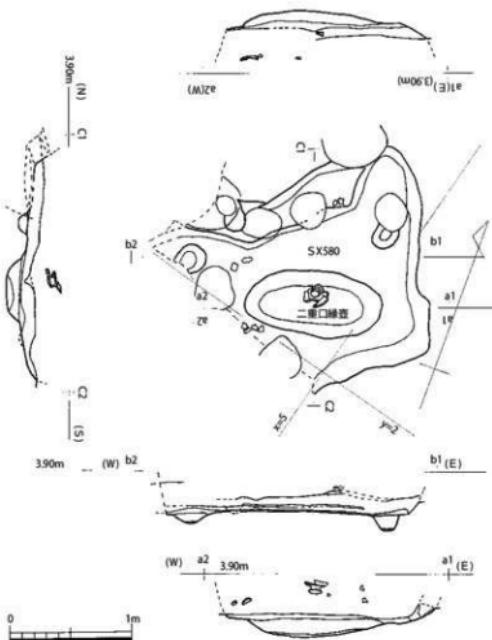


Fig.14 遺構実測図Ⅷ (S X580) (1/40)

### **S X (S P) 2 4 6・2 9 7 (Fig.12 左下・右下、PL.6-3,4)**

2 4 6が上部で、下部に2 9 7があった。S X 2 4 6は58×54cm、N-25°-E、深さ25cmの略円形土坑。土師器坏 (Fig.17-21) は13世紀以降の特徴か。S P 2 9 7は48×38cm、N-74°-W、深さ50cmの楕円形ピット。二段掘りで東側は深さ35cmのテラスがある。2 9 7覆土中より、「薩摩塔B」(中国式石塔片) (Fig.25-26) が出土。時期を示す遺物は高麗陶器の盤口壺 (Fig.17-22) で、12世紀代という (基山町教育委員会主税英徳氏教示)。博多湾岸の中国式石塔の初現を知る重要な遺構である。

### **S P 2 7 5・2 7 6 (Fig.12 右上、PL.6-8)**

2 7 5が2 7 6を切る。S P 2 7 5は47×44cm、深さ20cmの不整円形ピット。S P 2 7 6は、略南北推定48cm×東西40cmの、深さ18cmの楕円形ピット。上層と下層に疊を出土したが、柱の裏込めだろう。

### **S P 3 2 3・3 2 4 (Fig.12 右中上、Fig.5、PL.6-8)**

II区第1面下で検出。S P 3 2 4→S X 3 6 7→S P 3 2 3の順。S P 3 2 4は46×32cm、深さ36cmの楕円形ピット。S P 3 2 3は略東西48cm×南北推定40cmの略円形ピット。

### **S X 3 5 1 (Fig.12 右中下、Fig.5、PL.6-8)**

II区第1面下で検出。1面SP246・367および1面下SP324の下部。66×56cmの不整円形、N-21°-E、二段掘りで南側の深さ20cm、北側は30cm。

### **S X 3 0 4 1 (Fig.13 左上、巻頭図版 2-4 右端)**

以下はⅢ区検出遺構。3 0 4 1はピット状遺構。径80cm前後の不整円形、深さ45cm。瓦器椀や白磁皿が出土 (Fig.18-16,19)。12世紀前半～中頃の遺構か。

### **S X 3 0 3 9・3 0 4 6 (Fig.13 中上、Fig.6、巻頭図版 2-4 中央)**

上部に推定方形土坑のS X 3 0 3 9 (東西150cm前後) があり、下部に径75cm前後のピット状のくぼみS X 3 0 4 6の重複として把握したが、掘削後の調査区北壁土層断面の精査では (Fig.7)、S X 3 0 3 9の東半分は新しい土坑ないしピットであり (SX3039 東)、その西半分と3 0 4 6が一体で一つの遺構をなすものとして把握されなおされた。土層断面での認識が正しいだろう。しかし遺物は必ずしも分離できていない。瓦器椀 (Fig.18-17) などから新しい方は13世紀前半の遺構か。

### **S X 3 0 0 2 (Fig.13 右上、巻頭図版 2-3)**

S X 3 0 1 5を切る浅い土坑だが、3 0 1 5が井戸の場合はその中央部井戸側落ち込みの誤認の可能性もある。径110cm、深さ10cm。北側は攪乱で失われている。

### **S X 3 0 1 5 (Fig.13 中、PL.7-5)**

検出されたのは東西300cm×南北75cmの半円形で、北側は攪乱で破壊される。図は上層のみ掘削時のもので、実際はS X 3 0 5 6の掘削レベルまで掘っている (PL.7-5)。本来は径330cmの円形土坑で、底面が不明確でまだ掘削できるとすれば、これも井戸の可能性があり、井戸群では最新か。遺物が比較的多く出土した (Fig.18-1～7.58など)。土師器坏や瓦器などから12世紀後半～末の遺構か。

### **S E 3 0 1 3=3 0 5 6 (Fig.13 下、PL.7-3,4)**

南半を3 0 5 6、北半を3 0 1 3とした。東西3.7m以上 (4.2m前後か) ×南北3.5m、掘削は深さ85cmまでであるが、同様の遺構の重複が多いこと、平面規模から井戸と考える。中央に近現代攪乱があり、またかなりの範囲が調査区外となるため完掘できなかった。土師器の坏皿 (ヘラ切り・糸切り混在)・椀や瓦器椀などが出土している (Fig.17-50～59, Fig.18-10)。畿内系 (楠葉、和泉) 瓦器椀がある。12世紀中頃の廃絶か。

### **S E 3 0 1 2 (Fig.13 下、PL.7-3,4)**

1.2SX001

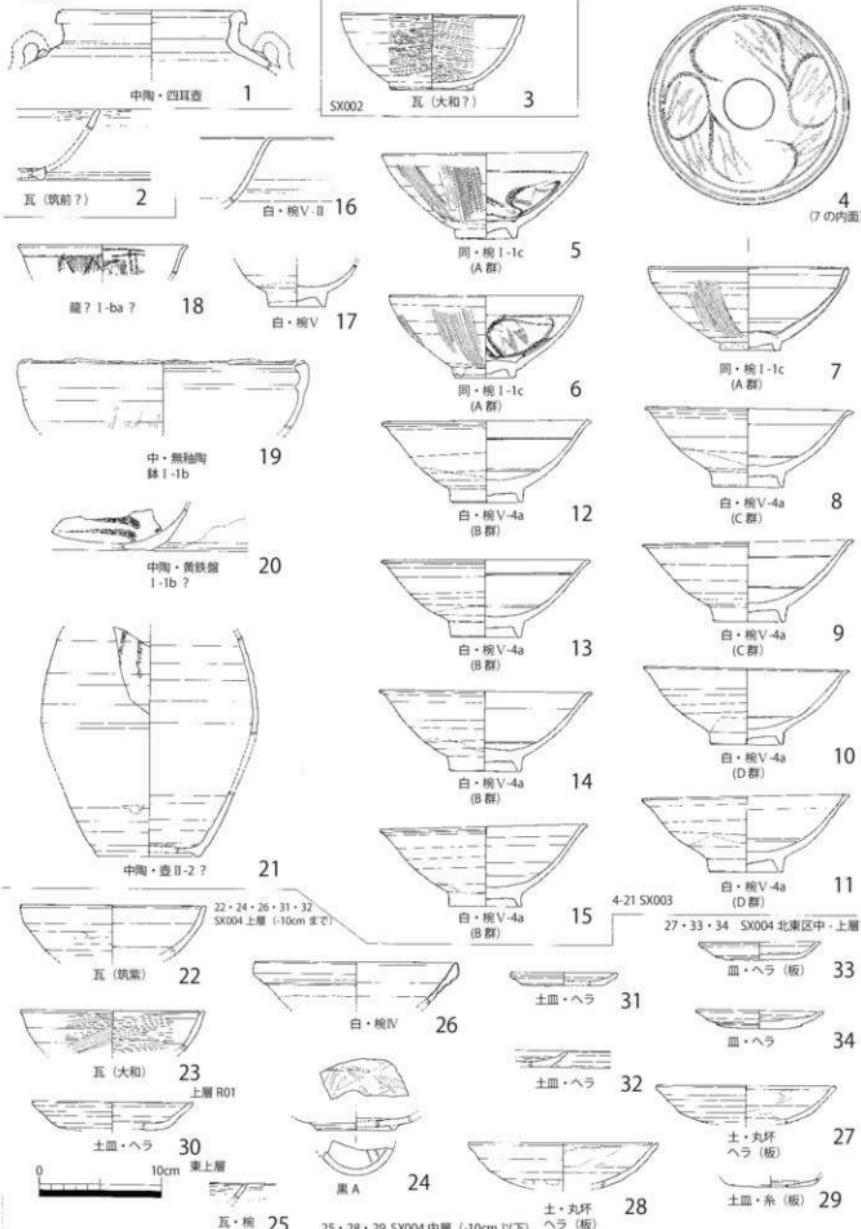


Fig.15 土坑・その他 (SK, SX) 出土遺物実測図 I (1/4) ※SX001, SX003, SX004上層

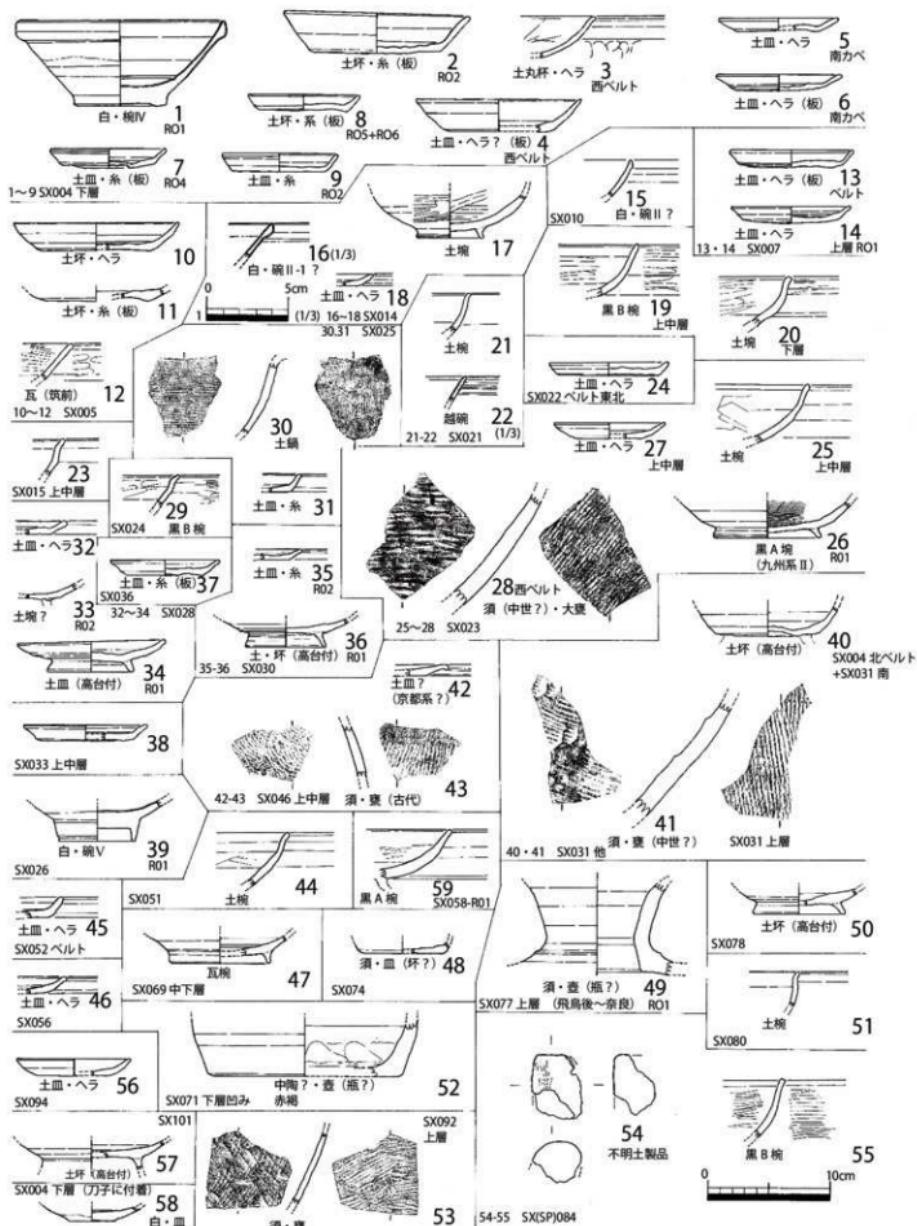


Fig.16 土抗・その他出土遺物実測図 II (1/4, 一部1/3)

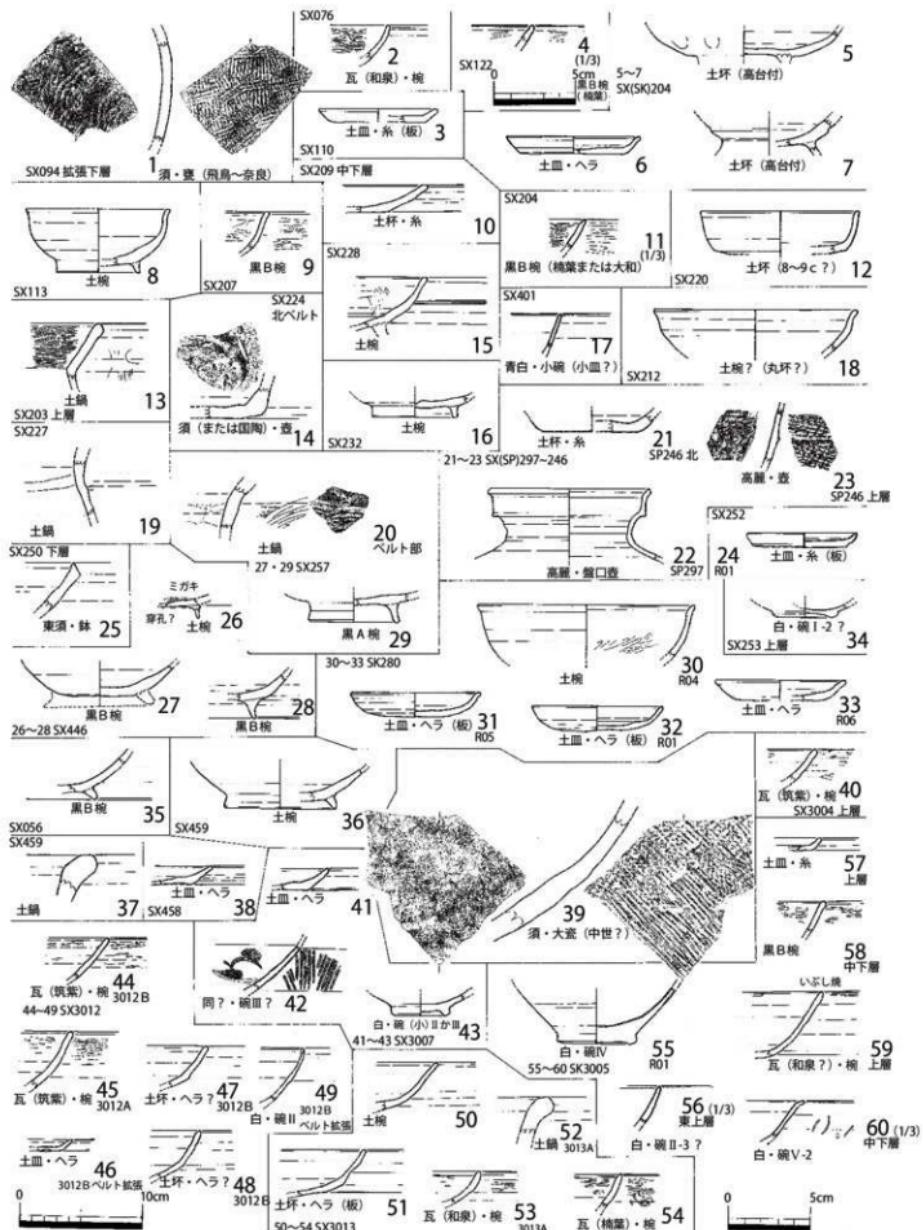


Fig.17 土坑・その他 (SK, SE, SX ほか) 出土遺物実測図 III (S=1/4, 一部1/3) ※一部ピット (SP) 含む

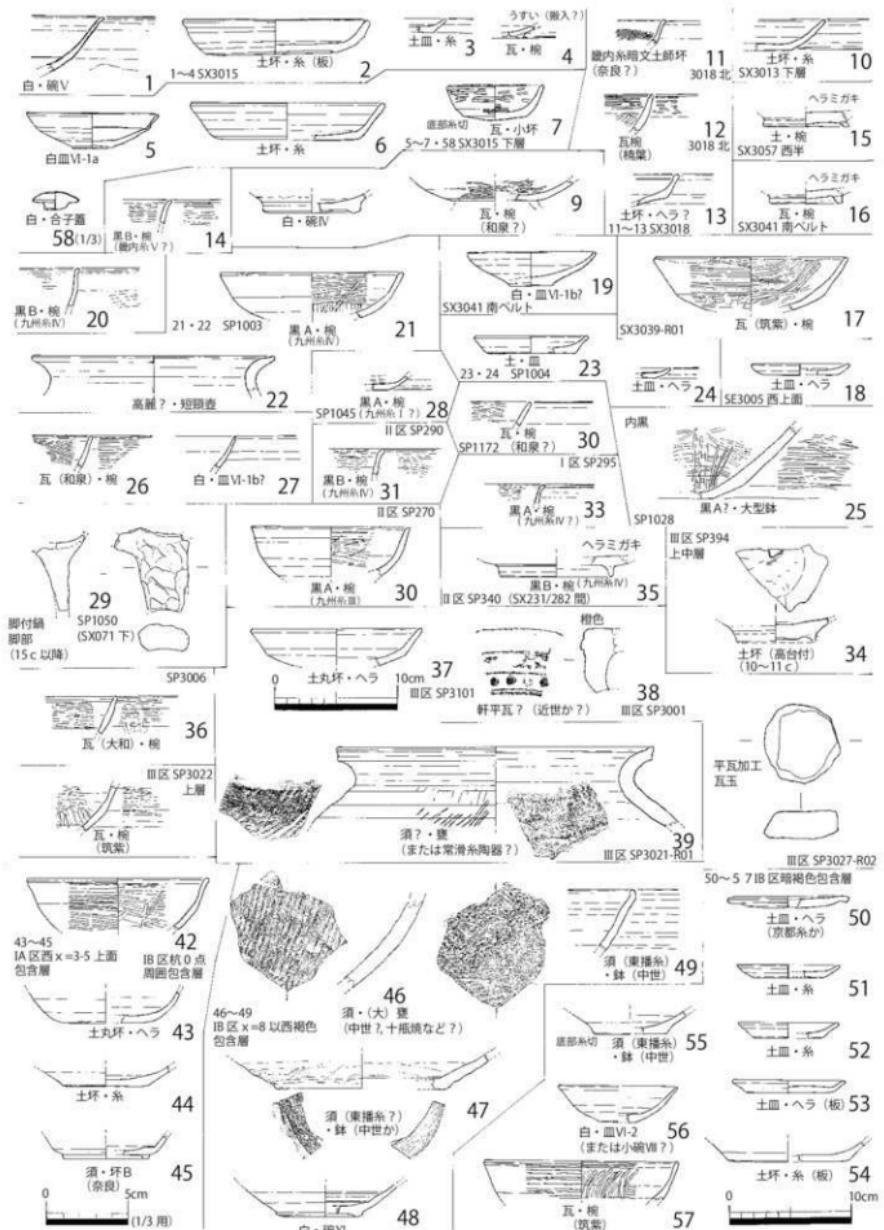


Fig.18 土坑・その他 (SK,SX,SEほか) 出土遺物、ピット (SP) 出土遺物、包含層出土遺物 I 実測図  
(S=1/4, 一部1/3)

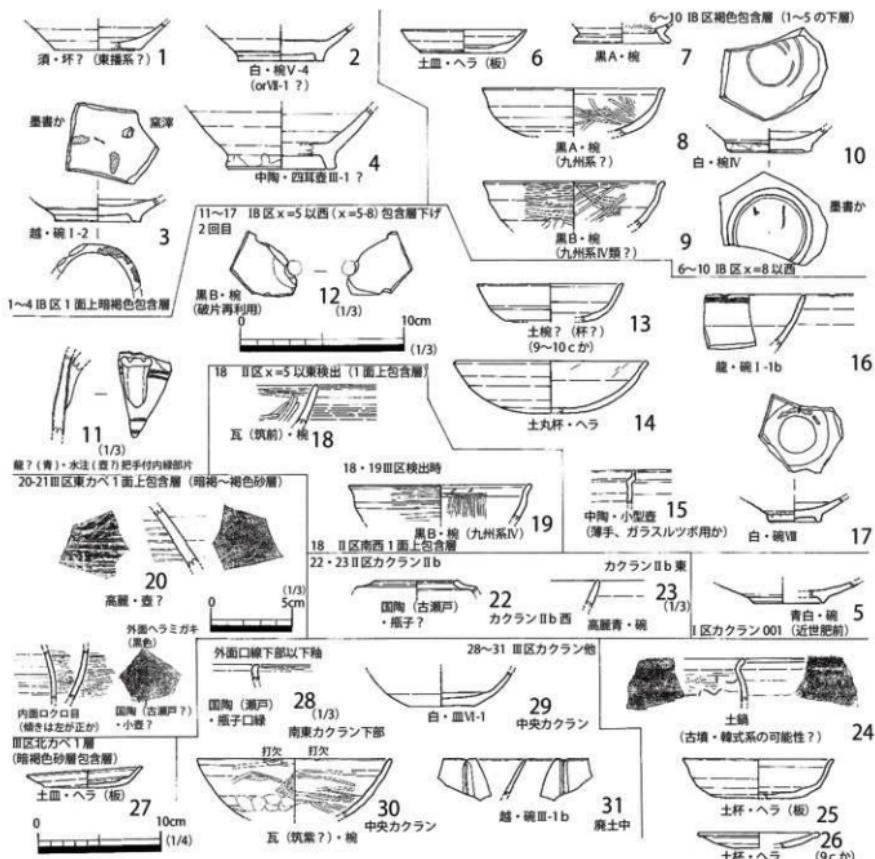


Fig.19 包含層および遺構検出時出土遺物 II, 挿乱出土遺物 (1/4, 一部1/3)

3057を切り、3013に切られる。検出できたのは北東 - 南西が3.7m、南北が3.2mだが、おそらく $4.6 \times 3.6$ mの楕円形になろう。深さ60cmまでしか掘れていないが、やはり規模などから井戸と考える。瓦器椀、土師器壺皿類(ヘラ切り主体)、白磁などが出土し、12世紀前半の廃絶か。

#### S X 3057 (Fig.13 下, PL.7-3,4)

南側は調査区外、北側は3013, 3012に切られる。深さは60cmまでしか掘削していないが、おそらくこれも井戸だろう。推定径3.7mとなる。土師器椀(Fig.18-15)や壺皿などが出土し、12世紀前半までの遺構か。

#### S X 580 (Fig.14, 卷頭図版 4-16, PL.7-1,2)

II区西側第2面で検出した小型の方形堅穴住居かあるいは方形周溝墓の溝の一部であろう。古代以降の他の遺構に切られる。225cm以上×175cm、N-45°W、深さ24~38cm。上層だが精製二重口縁壺

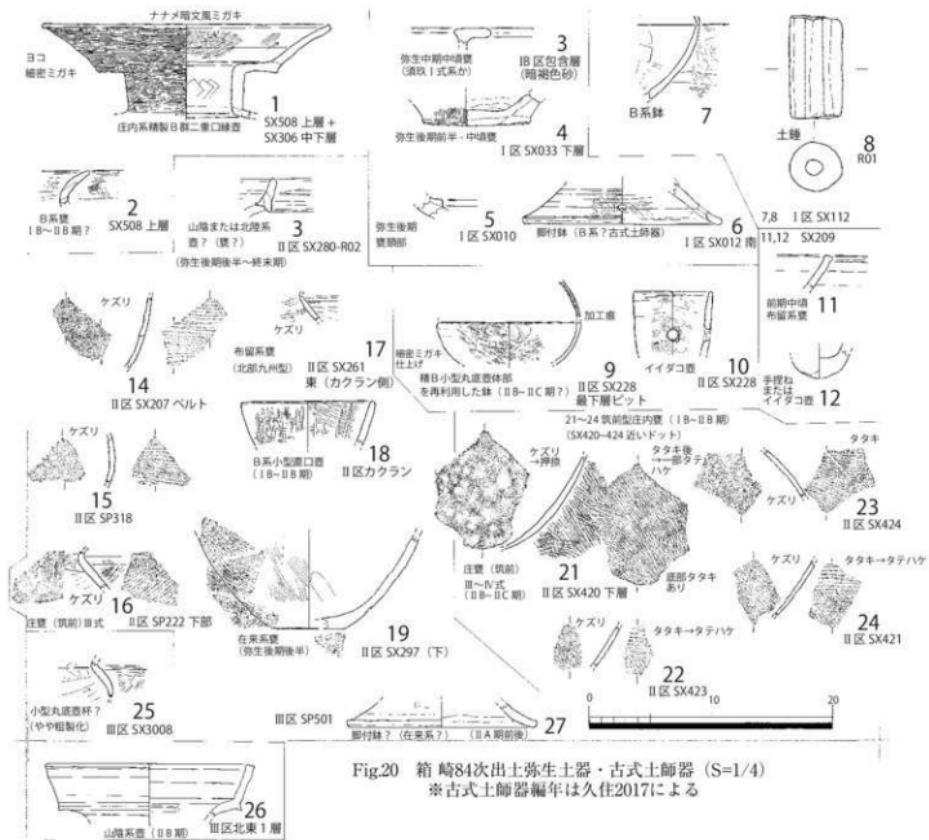


Fig.20 箱崎84次出土弥生土器・古式土器器 (S=1/4)  
※古式土器器編年は久住2017による

(Fig.20-1) が出土しており、どちらかというと周溝墓の可能性が高い。他に同時期の壺や精製小型丸底壺の破片がある。古墳前期前半（II B期：久住2017）の遺構だろう。

#### 4. 出土遺物

##### (1) 土器・陶磁器など（平安時代以降）(Fig.15～19)

紙幅もなく詳細な説明記述ができないため、挿図中に基本的な遺物の種類（一部器種分類）や調整技法、時期などを、下記の<凡例>のように略号などで注記している。出土遺構・層位なども挿図中に示している。また「検出遺構」での記述の中で、すでに触れている場合がある。

<凡例> (Fig.15～19)

「土」 = 土器類、「土様」 = 土器器形、「土環」 = 土器器坏、「土丸环」 = 土器器丸底环、「土皿」 = 土器器皿（小）皿、「ヘラ」 = 部底ヘラ切り、「糸」 = 土部糸底部糸、「板」 = 地板部目压痕、「土錠」 = 土器器錠、「白」 = 白磁、「青」 = 青磁、「越」 = 越州窯系青磁、「同」 = 同安窯系青磁、「龍」 = 龍泉窯系青磁、「青白」 = 青白磁、「高麗青」 = 高麗青磁、「中陶器」 = 中國陶器、「瓦」 = 瓦器（「瓦椀」 = 瓦器椀）、「黒A」 = 黑色土器A、「黒B」 = 黑色土器B、「黄鐵盤」 = 黄釉铁绘盤、「須」 = 須恵器、「東須」 = 東播系須恵器、「高麗」 = 高麗陶器（無釉陶器）、「備業」 = 大和「和泉」、「筑業」 = 瓦器椀および黑色土器B類の分類（○O型）、「国陶」 = 国產陶器、「近世肥前」 = 近世肥前系陶器器



Fig.21 古墳時代～飛鳥時代陶質土器・韓式系土器・須恵器、古代前半（飛鳥・奈良）  
土師器、古式土師器補遺実測図S=1/4

なお、古代後半期（平安時代以降）～中世の土器・陶磁器の分類と編年、年代観は下記文献を参照した。特に中世の輸入陶磁器分類については、本報告では①⑦の「大宰府分類」を使用している。黒色土器、瓦器、土師器皿の系統については、⑤⑬、⑩⑪⑫、④などを参照している。

- ①太宰府市教育委員会編 2000『大宰府条坊跡X V-1陶磁器分類編』太宰府市の文化財第49集
- ②中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- ③中島恒次郎 1995『各地の土器様相』12.九州北部』『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- ④伊野富近 1995『土器・陶磁器 1.土師器皿』『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- ⑤森 隆 1995『黒色土器』『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- ⑥森田 稔 1995『中世須恵器』『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- ⑦山本信夫 1995『貿易陶磁器 (2) 中世前期の貿易陶磁器』『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- ⑧尾上 実・森島康雄・近江俊秀 1995『土器・陶磁器 6.瓦器類』『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- ⑨森田 勉 1973『九州地方の瓦器類について一式分類と編年試案一』『考古学雑誌』第59卷第2号
- ⑩山本信夫 1990『統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究によせて—』『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会
- ⑪楠慶太 2007『土師器食器から見た中世博多の土器様相—博多遺跡群の土師器編年—』『九州考古学』第82号
- ⑫山本信夫 1988『大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器—10世紀～12世紀の資料(1)本文編一』『中近世土器の基礎研究』IV 日本中世土器研究会
- ⑬中島恒次郎 1992『大宰府における輪形態の変遷』『中近世土器の基礎研究』VII 日本中世土器研究会

## (2) 弥生時代～奈良時代の土器 (Fig.20・21)

84次調査では、弥生中期以降の弥生土器、古墳前期～中期前葉の古式土師器、古墳時代後半期～奈良時代の土師器、須恵器、古墳時代～飛鳥時代の韓式系土器、陶質土器なども箱崎遺跡の他の調査地点よりも比較的多く出土している。以下、一部のみ説明記述し、他は古代後半期～中世の土器・陶磁器と同様に、挿図中に器種分類、時期の略号や調整、出土遺構を記入している（<凡例>は30頁）。

全体としては、古墳時代初頭（II A期）から古墳時代中期前半までのものが多い。

Fig.20-1 の精製二重口縁壺は優品で（PL8-5.6）、胸部もあるが（Ph.1）破片が足りず図化できていない。おそらく底部穿孔壺で、出土遺構の SX508 は方形周溝墓など墳墓に関わるものだろう。Fig.20-3 は山陰系土器（または北陸系？）の搬入品とみられ、小型壺（小型壺の可能性もある）で、出雲の編年の「草

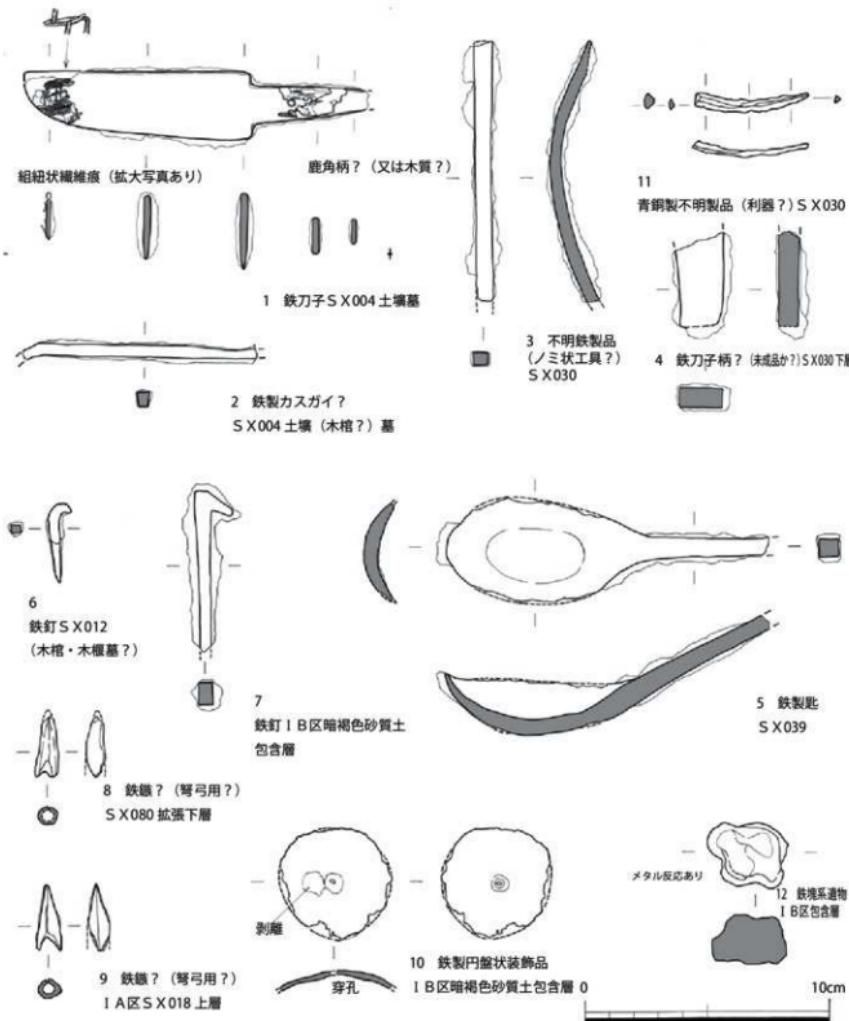


Fig.22 金属製品1 鉄刀子 S X004 土壙基（鉄・青銅）実測図（S=1/2）

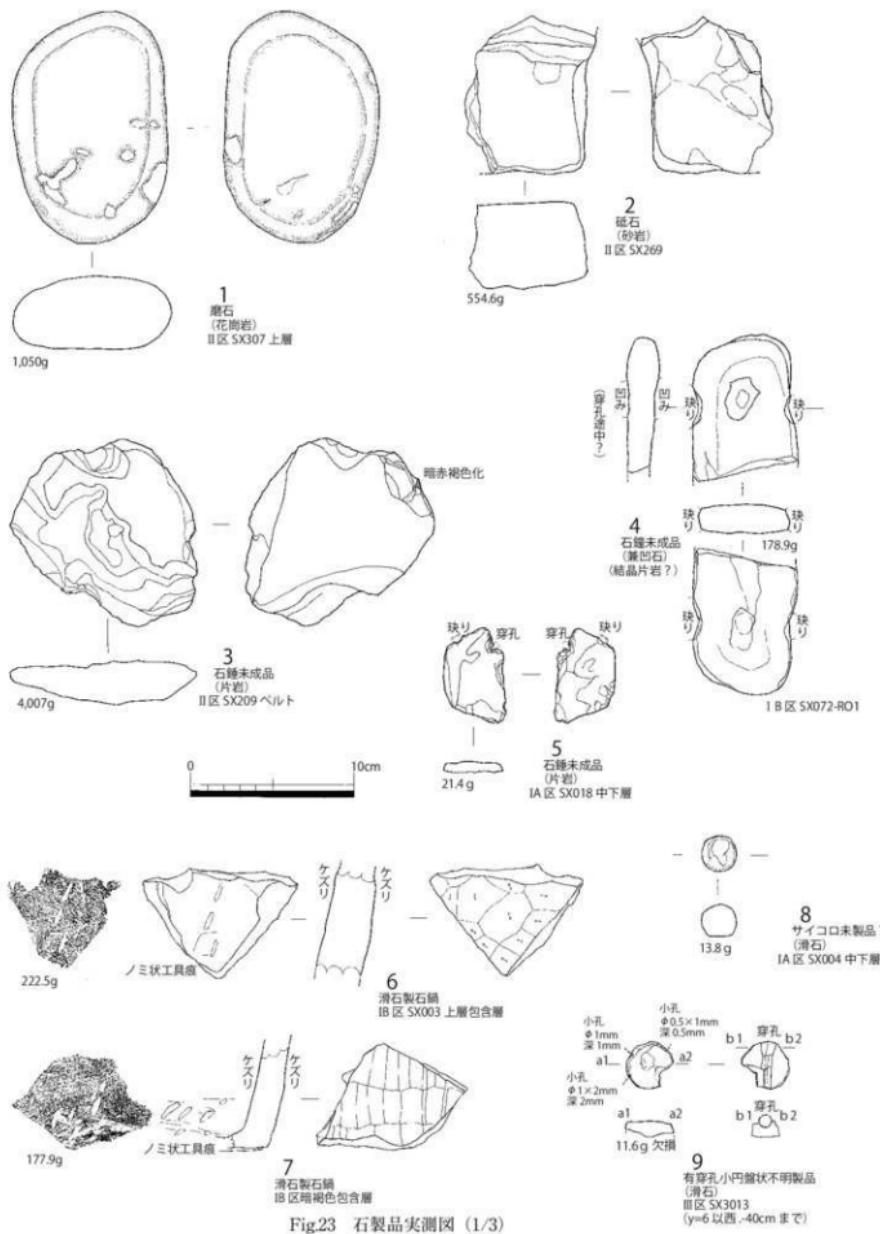
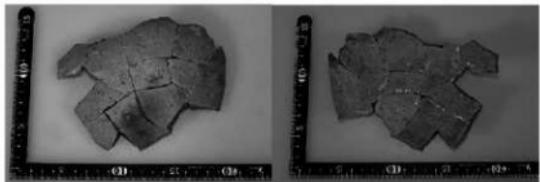


Fig.23 石製品実測図 (1/3)



Ph.1 SX508 出土二重口縁壺部破片

田3期（-4期）」で（赤澤秀則1992）、北部九州の編年（久住2008）の弥生時代後期後葉相（-終末期古相）であろう。Fig.20-9は、本来精製器種B群（次山淳1993）の小型丸底壺部を再加工して鉢にしたものとみられる。

る。また出土土器に「筑前型庄内甕」（久住1999・2017）の破片が多くあり、居住遺構（住跡など）の存在を予想させる。Fig.21-1は古代～中世前期の高麗無釉陶器の可能性もあるが、型式観と調整、焼成の微妙な相違から古墳後期～飛鳥時代併行（6～7世紀）の新羅土器（陶質土器）の可能性があるものとして掲載する（PL.8-4）。焼成・色調は異なるが、口縁部形態は6世紀中葉の元岡・桑原遺跡群桑原石ヶ元古墳群6号墳例などに類似する。Fig.21-4も、タキの特徴から古墳後期併行の陶質土器短頸壺の可能性がある。Fig.21-2は瓦質焼成に近いやや軟質の陶質土器で、おそらく古墳中期併行の馬韓土器（韓國忠清南道～全羅道）であろう。Fig.21-3は、底部がややレンズ状になるが、縦位併行タキ痕跡と底部の「ゲタ」のアタリ痕跡からやはり韓式系軟質土器の小型深鉢と考える。古墳中期であろう。Fig.21-8は土師器の坏だが、内面の黒斑または煤付着の上に墨書きらしきものがある。坏の時期は、おそらく奈良時代と思われるが底部回転ヘラケズりが特異か。

<凡例> (Fig.15～19)

精B=精製器種B群器種（次山1993）、「B系」=B系統土器群（=伝統的V様式系容土器群）（久住1999）、「庄甕（筑前）」=筑前型庄内甕（久住1999・2017）、「II A期」「II B期」「II C期」「III A期」=久住1999・2017による編年区分、「前期中頃」=古墳前期中頃（=II C期～III A期古相）、「須」=須恵器

なお、Fig.20・21の土器の時期区分（編年）や器種分類などは以下を参照している。

赤澤秀則「講武地区県宮圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡」島根県鹿島町教育委員会  
久住猛雄 1999・2017 ※7頁前掲（古式土器「久住編年」）

久住猛雄 2008「九州I 付編 弥生時代中期中頃～終末期古相までの井戸一括基準資料」『井戸再考』第57回埋蔵文化財研究集会資料集

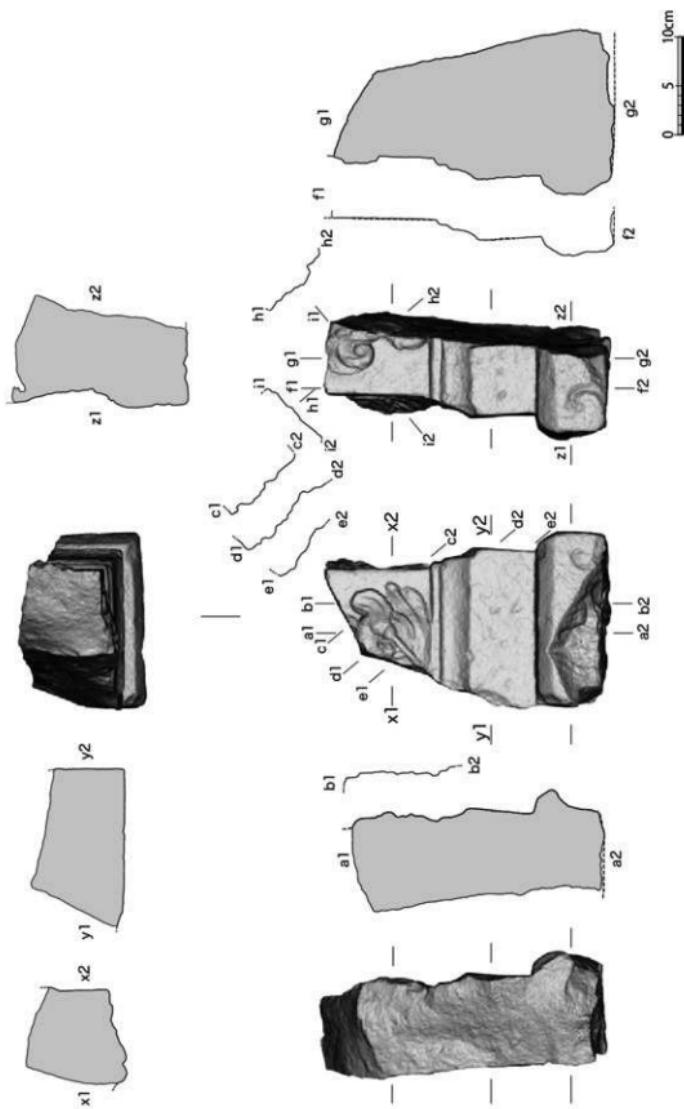
次山淳 1993「布留式土器における精製土器の製作技術」『考古学研究』第40巻第4号 考古学研究会  
舟山良一 2008「(2)編年案」「牛頭窓跡群 総括報告書」大野城市教育委員会（須恵器「牛頭編年」）

### (3) 金属製品 (Fig.22)

鉄製品は数多く出土しているが、主なもののみ実測し図示した。図化はごく一部のみだが、小釘特にI区の土坑から多く出土しており、それら土坑は土壙墓の可能性があり、木棺ないし木櫃の板材を接合させるものであろう。またFig.22-8,9のような小型三角錐状の鉄製品は今まで用途不明とされて来たが、林田憲三（埋蔵文化財課技能員、アジア水中考古学研究所理事長）の教示によると、13世紀後半に箱崎を襲った元寇（文永の役）の蒙古軍の「弩弓」用の鐵鎗ではないか？とのことである。参考意見として記しておく。この見解が正しいなら、84次調査地点も蒙古軍に荒らされたことになる。またFig.22-1の刀子は、柄は鹿角型の可能性がある（埋蔵文化財課 神啓崇の教示）。また刀身部分は複数の精巧な繊維（布）により重層的に包まれていたことがマイクロスコープによる観察（埋蔵文化財センター 松蔭葉穂）から明らかになった（PL.8-8,9）。

青銅製品に関しては、Fig.22-3のみで、これは工具または飾り金具の一部であろう。箱崎でも多い中国錢貨は全く出土していない。街場の中心部からは外れているためか。なおSX030からは工具・利器類が出土していることが特筆される。

Fig.24 「靈摩塔」個體A三次元計測図 (1/4)



(4) 石製品 (Fig.23 ~ 26)

容器(滑石製石鍋)を含む通有の、あるいは複多な石製品はFig.23に図示した。器種、岩石種、出土遺構・層位は挿図中に記したので、参照いただきたい。

本報告で問題になるのは、調査中あるいはその後の概要報告などで「薩摩塔」とした大小二つの破片である (Fig.24~26)。これまでの経緯上(註1)からもこの2片を、大きな破片を「薩摩塔(個

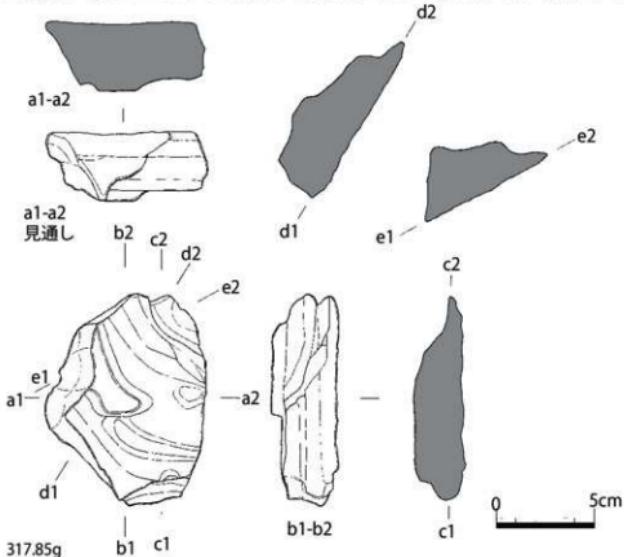


Fig.25 「薩摩塔」個体B実測図 (S=1/25)

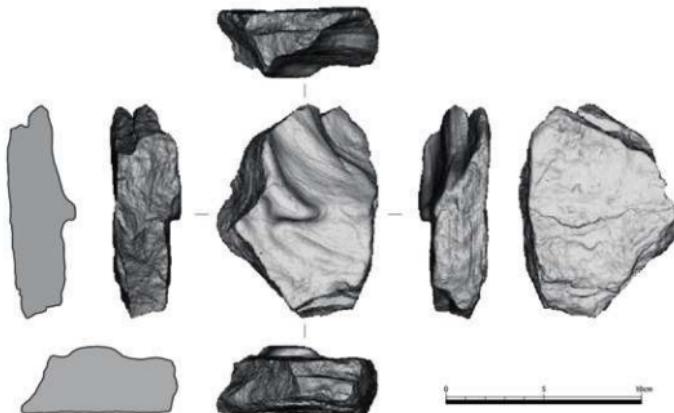


Fig.26 「薩摩塔」個体B三次元計測図 (1/25)

体）A」、小さな破片を「薩摩塔（個体）B」として報告するが、「薩摩塔」については定義も様々であり、またその曖昧な定義からその用語を極力用いない立場も存在する（桃崎祐輔・山内亮平・阿部悠理2011）。大きい破片である「薩摩塔A」についても、「薩摩塔」を特徴づける「高欄」部（井形 進2012）があるかどうか不明であり、厳密にはこの大小2片は「中国式石塔」片とした方がよい。以下、こうした「薩摩塔」に関する諸問題は「Ⅲ. 調査のまとめ」で触ることにして、石塔2片について事実報告を行う。なお「薩摩塔」の図化にあたっては、今回、「九州文化財計測支援団体」代表の永見秀徳の協力により、写真合成（Photoscan）による「三次元計測」を行うことにした。もともと、石造物に関しては「三次元計測」の強みが發揮でき、各側面からの計測図化が矛盾なく行えるという利点があり、記録保存の方法としてのアドバンテージを認めたからである。ただし断面図については、従来の「実測」の方法により、計測図の検証と凹凸の強調を意図して若干修正している。また従来の「実測」との対比のため、小破片の「薩摩塔B」に関しては、「実測図」と「三次元計測図」を対比させた（Fig.25・26）。

（以下の「薩摩塔A・B」の記述は、西田尚史（福岡大学大学院）の原稿を一部修正したものである。）

**Fig.24 (三次元計測図) の「薩摩塔A」**は中国系石塔片である。いわゆる「薩摩塔」の一部で、須弥壇の軸・下框・足の部分にあたる。一石で彫出され、正面・右側面の二面のみが遺存する。軸上部以上は欠失し、上部に「高欄」部があるかどうかは不明である。最大残存高 28.49cm、最大残存幅 17.9cm。正面は足最大高 7.09cm、最大幅 17.9cm。下框最高 10.7cm、最大幅 16.03cm。軸最大高 10.7cm、最大幅 10.93cm。右側面は足最大高 7.09cm、最大幅 7.46cm。下框高 10.7cm、最大幅 6.34cm。軸最大高 10.7cm、最大幅 7.21cm、重量 5.65kg。須弥壇足に単純な蕨手文を線刻する。下框は厚く、二段を設ける。軸に四天王と思われる尊像を彫出する。足・下框・軸とともに平面四角形をなす。四天王像は正面・右側面の二体のみ。正面の像は劍を左手に持ち、衣文を表現する。右側面の像は、蕨手状の雲文のみ確認出来る。「薩摩塔」の中では小型品である。石材は明茶灰色。典型的な梅園石ではないが、大陸（中国）で産出された凝灰岩と鑑定結果が出た（後述）。

**Fig.25 (実測図)・26 (三次元計測図) の「薩摩塔B」**は、中国系（式）石塔小片。最大高 10.8cm、最大幅 7.95cm、厚さ 3.52cm。表面に衣文の端部状の表現を陽刻する。石材は明茶灰色、一部が明赤褐色。梅園石などの大陸（中国）産の凝灰岩ではなく、日本列島で産出される凝灰岩の可能性が高いとの鑑定結果が出た。実際、持った感じの質感、特に比重が「薩摩塔A」に比べて明らかに軽い。

両例の石材については、大木公彦（鹿児島大学名誉教授：地質学・岩石学）が肉眼観察で鑑定し、これを高津孝（鹿児島大学教授：文献史学）がとりまとめたものを鑑定結果としてある。以下、大木・高津両氏の許可をいただきしているので、鑑定結果を引用する（遺物の番号・名称などは修正変更した）。

「**薩摩塔A**」：凝灰岩。有色鉱物が比較的多く、雲母類が目立つ。粒子が梅園石に比べて粗くあまり均質ではない。緑色から黒色の異質岩片を含む。岩相、密度から推定して梅園石に近い中国石材と考えられるが、これまで調べてきた典型的な梅園石とは異なる。

「**薩摩塔B**」：「**薩摩塔A**」とは質感がまったく異なる。密度が低く、打音も低い。梅園石、中国石材ではない。凝灰岩ではあるが葉理が見られる。九州にもありそうな石。色は二次的で、黒いシミ状のものは付着物と考えられる。（以上、大木公彦による鑑定結果を高津孝がまとめたもの。文中敬称略。）以上のように、「**薩摩塔A**」は、「**薩摩塔**」に一般的な「梅園石」とは微妙に異なるが、それに近い地質の中国の凝灰岩、「**薩摩塔B**」は、中国産石材ではなく日本列島（九州）の凝灰岩の可能性があるとの鑑定結果を得た。特に後者の鑑定結果については重大な結果と意義をもたらすものであるが、これについては後述する。

(註1) すでに、伊藤幸司 2018 (7 頁前掲) に「薩摩塔」として言及、引用がある。

### III. 調査のまとめ

ここでは、特に「薩摩塔」(中国式石塔)について考察する(以下、西田尚史の元原稿を大幅に修正追加したものである)。「薩摩塔」は、鹿児島県南九州市・長崎県平戸市周辺・博多湾・玄界灘周辺を中心に分布する中国系石造物である。須弥壇・塔身・屋根・宝珠の4つの部分からなり、須弥壇は高欄・上框・軸部・下框・足に分かれる。軸部の四面もしくは六面には四天王を、塔身に尊像を刻む。①瓦葺屋根や須弥壇等の建築物的表現、②台座の雲文・蕨手蝶文、③尊像の甲冑や衣文の表現など、中国的要素が多く、福岡県久山町首羅山遺跡例や平戸市志々岐神社例など、しばしば宋風獅子とセットで見出され、宋元代に大陸から搬入された石塔とされている。「薩摩塔」の石材は、中国浙江省寧波周辺で産出される「梅園石」であることが指摘されており、高津孝・橋口亘らは鹿児島県・長崎県下の薩摩塔石材の理化学的分析をおこない、「梅園石」を用いて大陸で製作された可能性が高いことを示した(高津孝・橋口亘 2008、大木公彦・古澤明・高津孝・橋口亘 2009)。「薩摩塔」を含む九州の中国系石塔は11世紀末以降の日宋の交易のなかでバラストとともに中国商人により主要港湾に搬入され、主要港湾周辺の寺社、航海目標や水源にあたる山岳に分布する。石造物が寄進された主要港湾周辺の寺社は中国商人と関わりを持ち、対外交渉に深く関与していた(井形進 2008-2012、桃崎祐輔 2008、桃崎・山内・阿部 2011)。

箱崎 84 次の中国式石塔片「薩摩塔 A・B」は、発掘調査により遺跡から発見され、かつ共伴遺物から廃棄時期が判明した貴重な例である。足に蕨手文を刻み、軸に四天王像を彫り出す。足・軸ともに平面四角形をなす。四天王像は二面のみ残り(個体A)、①劍を持ち、衣文を表現し、②雲文のみが確認できる。形態は首羅山遺跡薩摩塔、宇美八幡宮旧在薩摩塔、志賀島火炎塚薩摩塔に似ることから、型式的に「薩摩塔」に近い。ところが典型的な「梅園石」ではないこと(前述)、高欄の有無が不明であることなど問題が残る。「薩摩塔B」に至っては、衣文の大きさから想定される四天王像の大きさから、石塔としては大型品で、「薩摩塔」ならば最古式の様相となる(江上智恵 2018)。ところが、最古式の「薩摩塔」は12世紀末の東大寺再建時に造られた石獅子台座よりも新しい13世紀初頭頃が推定されている(江上 2018)。しかも「薩摩塔B」は、衣文の端部表現など作風・技術は宋風だが、中国の石材ではない可能性が高い(密度と比重の相違は重要である)。一方、この「薩摩塔B」が廃棄されたのは共伴遺物から12世紀代である。最古式の「薩摩塔」の出現想定年代より早い。このことを重く見れば、東大寺の「伊派」のような宋系石工が箱崎に渡来して、まずは在地(列島)で故地の石材に類似する石材を見出して中国式石塔を製作しようとした可能性もある。さらに言えば、「薩摩塔」自体、石材は中国産、個々の属性・要素は宋風とされるものの、その「形式」総体としては中国には存在せず、石工は宋人であるが、石材を交易船の「バラスト」として輸入して(当時の船で大型石材でも搬入可能であることは林田憲三の教示を得た)、列島なかんずく箱崎周辺で製作した可能性を考えるべき時期になっているのではないだろうか。今後、箱崎の発掘調査においては、石塔片の有無や石工の残滓である凝灰岩片の出土に注意すべきであり、そのことが「薩摩塔問題」の解決につながると思われる。

＜参考文献＞ 井形 進 2008 「首羅山遺跡の宋風獅子と薩摩塔」「首羅山遺跡一福岡平野周縁の山岳寺院」久山町教育委員会／井形 進 2012 「薩摩塔の時空 異形の石塔をさぐる」花人社選書4／江上智恵 2018 「薩摩塔の編年試案—考古学の見地から—」「九州に偏在する中国系影刻についての基礎的研究—薩摩塔と宋風獅子の基準設定にかかる考察—」平成26年度～29年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書 研究代表者 井形 進(九州歴史資料館)／大木公彦・古澤 明・高津 孝・橋口 亘 2009 「薩摩塔石材と中国寧波産の梅園石との岩石学的分析による対比」「鹿児島大学理学部紀要(地学・生物学)」42／高津 孝・橋口 亘 2008 「薩摩塔小考」「南日本文化財研究」7／桃崎祐輔 2008 「経塚と瓦からみた首羅山の歴史」「首羅山遺跡」(前掲)／桃崎祐輔・山内亮平・阿部悠理 2011 「九州発見中国式石塔の基礎的研究—所謂「薩摩塔」と「梅園石」製石塔について—」「福岡大学考古学研究室研究調査報告第10冊 福岡大学考古資料集成4」



1. I区全景（南から）



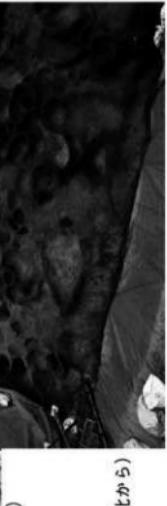
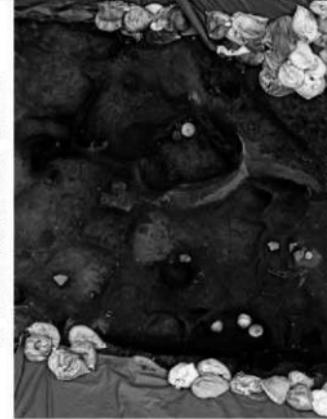
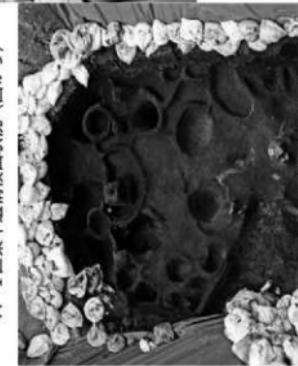
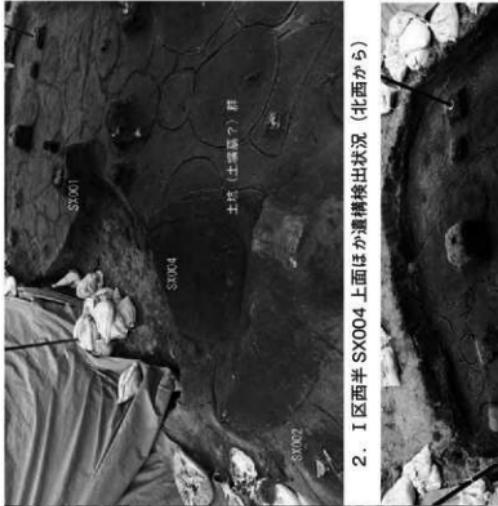
2. II区全景（東から）



3. III区全景（東から）



4. III区全景（北から）





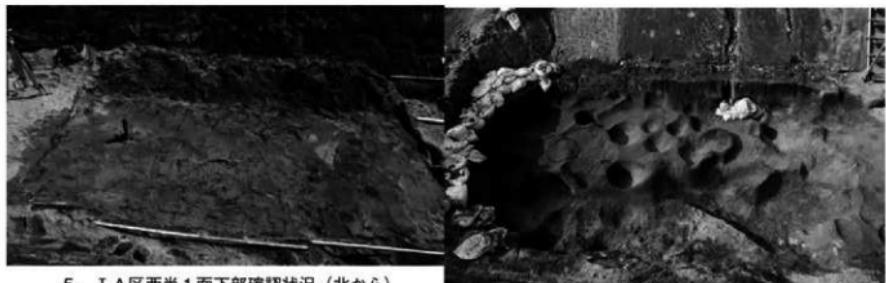
1. IA区西側遺構掘削・検出状況（北東から）

2. I区中央部遺構掘削状況（北から）



4. I区 SX004 ほか中央土壤墓群（北から）

3. I区中央部遺構群掘削状況（南から）



5. IA区西半1面下部確認状況（北から）

7. IB区1面下部遺構検出・掘削状況（南から）



6. IA区 X=0 ~ 2m 1面下部遺構検出状況（北から）



8. IB区1面下部遺構検出・掘削状況（北から）



1. I 区西半2面遺構検出・掘削状況（南西から）



2. I B区2面遺構検出・掘削状況（南東から）



3. I 区西半2面遺構検出・掘削状況（西から）



4. I 区 SX001 「薩摩塔」出土状況（東から）



6. I 区 SX002 上面遺物出土状況（北から）



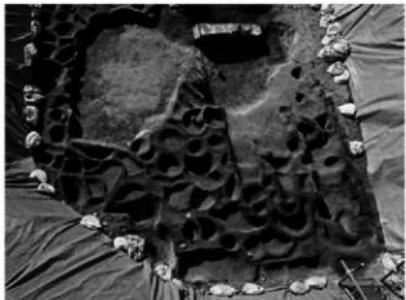
5. I 区 SX001 「薩摩塔」検出状況（南東から）



7. I 区 SX002 遺物・人骨出土状況（南から）



8. I 区 SX003 北側拡張遺物出土状況（北から）



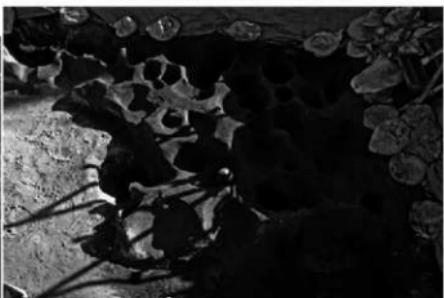
1. II区中央～東半部遺構掘削状況（東から）



2. II区東半部遺構掘削状況（西北西から）



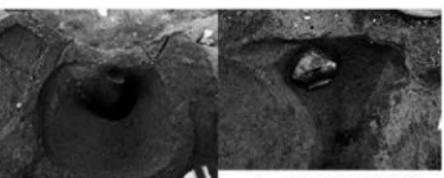
3. II区南西部遺構掘削状況（北から）



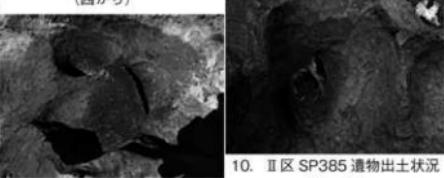
4. II区南西部1面下部遺構掘削状況（北から）



5. II区東半部2面遺構検出・掘削状況（北から）

7. II区SX152 挖削状況  
(西から)

9. II区SX351,SP323・324 挖削状況（西から）

10. II区SP385 遺物出土状況  
(南から)

11. II区2面SX508 検出状況（西から）

12. SX508 遺物出土状況  
近景（西北から）

6. II区SX003北半振削状況（西から）



1. I区 SX004 稲出途中状況（西から）

2. I区 SX004 墓壙掘削途中遺物出土状況（北東から）



3. SX004 墓壙掘削途中南壁遺物出土  
状況近景（南西から）

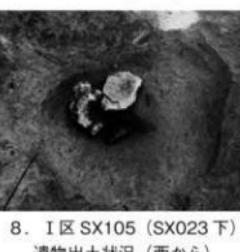
4. SX004 完掘南壁遺物出土状況近景（南東から）



6. I区 SX028 遺物出土状況 7. I区 SX026 上層遺物出土  
状況（東から）



5. SX004 人骨のみ完掘状況（南西から）



8. I区 SX105 (SX023下)  
遺物出土状況（西から）



9. I区 SX039 鉄器出土状況  
(北から)



1. SX508 中央遺物出土状況（西から）

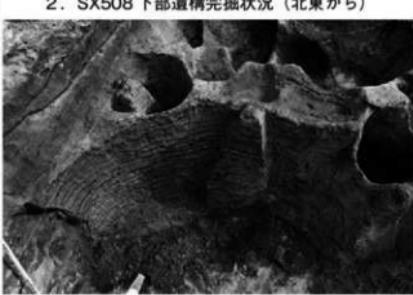


2. SX508 下部遺構完掘状況（北東から）



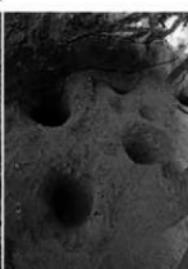
3. Ⅲ区中央井戸遺構下部確認状況（東から）

※擾乱掘削レベルまで

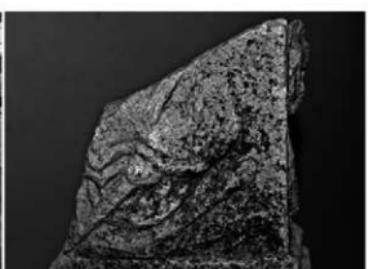


5. Ⅲ区 SX3015 完掘状況（北から）

※擾乱掘削レベルまで

4. Ⅲ区中央井戸遺構下部確認状況  
(南から) ※擾乱掘削レベルまで

6. Ⅲ区北西部ピット群掘削状況（南から）



7. 「薩摩塔」片個体A正面四天王像

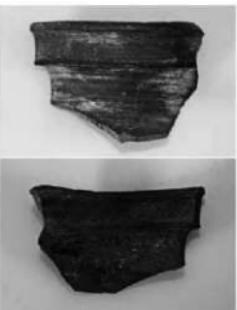
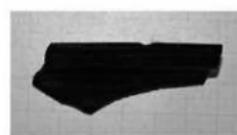
8. 「薩摩塔」片個体B表面  
(上)、裏面（剥離面）(下)



1. 「薩摩塔」片個体A側面四天王像



2. 「薩摩塔」片A共伴四耳壺片 (Fig.15-1)

3. 「薩摩塔」片B共伴高麗陶器壺片  
(Fig.17-22)

4. 陶質土器（または高麗陶器？）短頸壺片 (Fig.21-1)



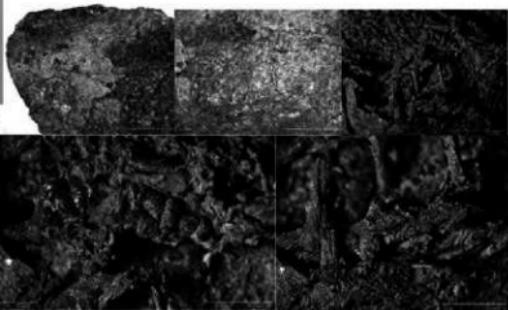
6. 精製二重口綠壺内面研磨調整状況

7. 匙状鐵製品X線写真  
(Fig.22-5)

5. SX508 出土精製二重口綠壺 (Fig.20-1)



8. SX004 出土鐵製刀子X線写真 (Fig.22a-1) ※纖維付着



9. SX004 出土鐵製刀子付着纖維ほか有機質拡大写真 (Fig.22-1) ※纖維付着

# 報告書抄録

ふりがな	はこざき58-はこざきいせきだい84じちょうさのほうこく-			
書名	箱崎58			
副書名	-箱崎遺跡第84次調査の報告-			
巻次				
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書			
シリーズ番号	1373			
編著者名	久住猛雄			
編集機関	福岡市教育委員会			
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4667			
発行年月日	西暦2019年3月26日			
遺跡名ふりがな	はこざきいせきだい84じちょうさ			
遺跡名	箱崎遺跡第84次調査			
所在地ふりがな	ふくおかしひがしくまいだし1ちょうめ362ばん			
遺跡所在地	福岡市東区馬出一丁目362番			
市町村コード	40131			
遺跡番号	2639			
北緯	北緯33度36分37.50秒 (世界測地系)			
東経	東経130度25分24.92秒 (世界測地系)			
調査期間	20170703日～20170915			
調査面積(nf)	203nf			
調査原因	共同住宅建設工事			
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落、都市	弥生時代～飛鳥・奈良時代、平安・鎌倉時代	遺構はほとんど11～14世紀の古代末～中世前半の多数の密集した土坑・柱穴である。井戸は調査区北東部に複数基重複して検出した。土坑のうちには、小剣の検出や平面プロファイル、人骨やその痕跡の検出、腐葉土の検出などから土壙墓と判断できるものがあった。また白磁と同安窯系青磁がわずかに出土している。	弥生土器(弥生時代中期～終末期)が少量、古墳時代前期～中期前半の古式土師器が若干、古墳時代後半～飛鳥時代の土師器と須恵器が少量、奈良時代の土師器と須恵器が付加する。古墳時代併用期とみられる韓式系土器、陶質土器(新羅土器)が出土した。その他、古代後期(平安時代中期～10世紀)から中世前半期(14世紀まで)の土師器、黑色土器、瓦器、須恵器、輸入陶磁器、国産陶器、瓦類などが大量である。石製品や鉄製品も一定量出土したほか、人骨も出土している。その他青銅製品がわずかにある。出土量はジャケース(中箱)にして28箱である。石製品には、中国寧波周辺の「梅園石」に類似した(厳密には同一ではない)「薩摩塔」に類似する中國式石塔の大きな破片が出土し、さらに中國式石塔とみられる小片も出土した。	調査地は、葛城宮創建(10世紀前半)以来の中世都市の町場の一部として展開したことが伺えたが、11～13世紀には一部が墓地として展開していくことが分かった。さらに「薩摩塔」に類似する中國式石塔が大約2点出土した。「薩摩塔」などの中國式石塔の遺跡からの出土例は少なく、かつ共伴遺物から施設時期が特定できる例は今回の調査が初めてとなる。例は今回の調査が初めてとなる。「薩摩塔」ないし中國式石塔の存在は、日本貿易の象徴とも言える。大きな破片1点(「個体A」)は中國寧波周辺の「梅園石」に近い、地層の岩石で製作され、かつ比較的古い型であると推定された。また小片(「個体B」)の方は、12世紀の柱穴から出土しており、「薩摩塔」の最古型式に近い様相の四脚王像の一部を表現しているが、施設年代が古いため、かつ石材が中國産ではない可能性が指摘され、「薩摩塔」の成立過程や上限年代、さらにはその製作地をめぐる諸問題に一石を投じた調査成果と言える。

## 箱崎58

一箱崎遺跡第84次調査の報告一  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1373集

2019年3月26日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神一丁目8-1

印刷 株式会社大里印刷センター  
福岡市東区二又瀬新町12-29

